

高崎城X

高崎城梅ノ木郭遺跡

前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎増築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

1993年

高崎市遺跡調査会

序

来たるべき輝かしい21世紀まで残すところあとわずかとなりました。高崎市におきましても今までの絶え間のない発展に加え、更に21世紀という未来へ向けて、大いなる飛躍を熱望しております。

このようなずばらしい営みを続けている高崎市は、古来より多くの先人たちも居を構え、営みを続けてきた、山柴水明の楽天地であります。こうした先人たちの残したものは、有形、無形の文化財だけでなく、埋蔵文化財として、地下に眠っているものも数多くあるわけです。わたしたちは、歴史の後継者として、これらの文化財を絶やすことなく、未来の人々へ伝えていくという、大いなる使命があるのではないのでしょうか。

近年、開発、再開発が激増するとともに、埋蔵文化財の調査も数多く行なわれようになりました。先人たちの残していった貴重な資料が数多く発見され、地域の歴史解明に貢献しつつあります。

ここに報告いたします「高崎城X（梅ノ木郭）遺跡」は、前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎増築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査概報であります。

本遺跡周辺は、古代から近代に至るまでの数多くの生活の跡が発見されました。特に近世の調査は幾多にわたって行なわれ、史実の解明が成されつつあります。

本遺跡におきましては、小調査区ながら、石組みや池状などの特殊なものも含めて、中世の遺構が数多く発見されました。まだ不明な点が多い中世和田城の郭の一部とも考えられ、和田城に係りのある遺構の可能性もあります。今後の中世史解明の一助になれば幸いです。

最後に、刊行にあたり、発掘調査及び本書作成のために、御指導、御協力いただいた関係諸機関、並びに、地元関係者に厚く御礼を申し上げます。また、整理編集作業に携っていただいた方々や厳しい気候の中にも関わらず発掘作業に携っていただいた多くの方々の労をねぎらい、序と致します。

平成5年3月

高崎市遺跡調査会

会長 網 中 正 昭

例 言

- 本書は、平成3年度の前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎増築事業に伴う、埋蔵文化財発掘調査の概要をまとめたものである。
- 発掘調査は、高崎市遺跡調査会がたった。
 - 〈事務局〉 石井忠樹
 - 〈調査担当〉 村井田雅明・黒沢元夫
- 当該事業の所在地及び発掘調査の期間・面積は下記の通りである。
 - 〈所在地〉 高崎市高松町26-2
 - 〈調査期間〉 発掘調査 1991年10月1日～1991年12月15日
資料整理 1991年12月16日～1993年3月19日
(資料整理については、断続的に行う。)
 - 〈調査面積〉 約450m²
- 本書の執筆・編集は、黒沢が行った。遺物復元・実測・挿図作成等の諸作業は、担当者の指示のもとに矢島弘子、桜井君代、小島明子が行った。
- 写真撮影については、遺構写真は黒沢・小池享が、遺物写真は、担当者の指示のもとに小池享が撮影した。
- 高崎市教育委員会による本遺跡の遺跡番号は、200である。
- 出土遺物・図面等は、高崎市教育委員会で保管している。
- 基準点測量は㈱小和瀬測量に、空中写真撮影については(有)青高館に委託した。
- 発掘調査及び概報作成にあたり、下記の方々に御協力いただいた。(敬称略)
木津博明、関口修、地元関係者。記して謝意を表する。

凡 例

- 遺構図の縮尺は、土坑については、60分の1とした。
- 遺物実測図の縮尺は、2分の1、3分の1、4分の1、6分の1とした。
- 遺構実測図中の方位記号は座標北を示す。(国土座標第Ⅸ系)
- 土器、陶器、磁器の実測は、原則的に4分割法をとり、左2分の1に外面、右2分の1に内面、断面を記載した。
- 遺物破片の拓影図については、実測図の左側に外面を右側に内面を記載した。
- 遺物番号は通番とし、実測図、観察、写真の各番号は一致する。70～72番は写真のみ
- 遺物観察表の「法量」に関する項目の内、()内の数字は推定値を示す。
- 本書内では次の略号を用いた。土坑についてはSK、井戸についてはSE、溝及び溝状遺構についてはSD、掘立柱建物はSBである。遺跡全体図においては、K、E、D、Bである。
- 遺物観察表で、欠損のために計測が不可能な項目及び遺物特徴の記述が不可能な項目については一とした。

目 次

序
例言
凡例

第1章 経 緯

- 第1節 調査に至る経緯……………7
- 第2節 遺跡の立地……………7
 - 1. 遺跡の地理的環境……………7
 - 2. 遺跡の歴史的環境……………8
 - 3. 周辺の遺跡……………8

第2章 経 過

- 第1節 調査の概要……………10
 - 1. 調査の方法……………10
 - 2. 調査の経過……………11
 - 3. 基本土層の概要……………11
 - 4. 検出遺構と出土遺物の概要……………11

第3章 結 果

- 第1節 遺 構……………13
 - 1. 25号土坑……………13
 - 2. 6号土坑……………15
 - 3. 26号土坑……………15
 - 4. 29号土坑……………17
 - 5. 3号井戸跡……………17
- 第2節 遺 物……………18
 - 1. 須恵器・軟質陶器等……………18
 - 2. 石造物……………22
 - 3. 石 臼……………23
 - 4. 古 銭……………24
 - 5. 瓦……………24
 - 6. 陶磁器……………25
 - 7. 石製品……………26
 - 8. その他の遺物……………26
 - 9. 遺物観察表……………27

写 真 図 版……………33

挿図目次

図1	周辺の遺跡図	9
図2	調査区設定図	10
図3	基本土層柱状図	11
図4	25号土坑実測図(1)	13
図5	25号土坑実測図(2)	14
図6	6号土坑実測図	15
図7	26号土坑実測図	16
図8	29号土坑実測図	17
図9	3号井戸跡実測図	17
図10	須恵器・軟質陶器等実測図(1)	18
図11	須恵器・軟質陶器等実測図(2)	19
図12	須恵器・軟質陶器等実測図(3)	20
図13	須恵器・軟質陶器等実測図(4)	21
図14	石造物実測図	22
図15	石臼実測図	23
図16	古銭拓影図	24
図17	瓦実測図	24
図18	陶磁器実測図	25
図19	石製品実測図	26
図20	その他の遺物実測図	26

表目次

表1	須恵器・軟質陶器等観察表	27
表2	石造物・石製品観察表	30
表3	石臼観察表	30
表4	古銭観察表	31
表5	瓦観察表	31
表6	陶磁器観察表	31
表7	その他の遺物観察表	32

第1章 経緯

第1節 調査に至る経緯

開発・再開発の波は、とどまるところを知らないように、現在も激しく打ち寄せている。群馬県の玄関口といわれる高崎市においても、例外ではない。

現在は、ハイテク時代といわれるように、交通機関から住宅環境や職場環境など生活空間の至るところに、新科学の芽が進出してきている時代である。このような新しい変化に対応するためには、開発や再開発は、結果的な部分として、必然的についてまわらざるをえないのかもしれない。しかし、已むを得ない開発であったとしても、開発の影に隠れがちな（氷山の一角になっている）文化財にもう少し目を向けていく必要があるだろう。

こうした中で、東京高等裁判所は、前橋地方家庭裁判所高崎支部の庁舎増築を予定した。現建物だけでは手詰まりな状態であり、円滑で且つ迅速な仕事を行っていくためには、庁舎の拡張が早急に必要であった。

増築面積の建て坪は、約450㎡と、それほど広くはない。しかし、本調査区周辺は、弥生時代から近代にかけての幅広い期間にわたり、貴重な遺構が多数検出されている。狭い面積であっても、重要な歴史解明の糸口を多分に含んでいる可能性が高い。

このようなことを念頭におきながら、当事業担当者との事前協議を幾度となく行った。文化財の緊急発掘調査ということに関しても十分な理解と協力をお願いして、10月1日より調査を行う運びとなった。

第2節 遺跡の立地

1. 遺跡の地理的環境

渋川市が日本のへそと言われるように、地理的にみると高崎市も、ほぼ日本の中央部に位置している。関東平野からみると北西部端にあたり、後背地として赤城、榛名、妙義、御荷鉾などの山々が連なっている。山地から平野への出口になっているところなので、扇状地的な場所であり、丁度地形の変換地的な位置にあるといえる。

また高崎市は、烏川と碓氷川の合流地点であるとともに利根川にも近い。中山道や三国街道の合流地点でもあり、鉄道も多数の路線が乗り入れている。

このようなことからわかるように、高崎市は、昔から河川や道路を利用した物資や文化の集散地であるとともに、交通の要所にもなっている。

高崎市の地形については、大きく三種類に分類できる。

第一は、烏川、碓氷川の東に展開する台地である。前橋、伊勢崎台地と呼ばれており、河川の水面より約10m～20m程高い位置にある。この台地は、烏川の左岸から利根川両岸までの地

域一帯に広がっている。一見扇状地状を呈しているが、構成物質は主に火成活動による泥流堆積物である。

第2は、烏川、碓氷川、井野川の周辺に形成された低地である。低地は、ほぼ川の水面と高さが変わらない氾濫原であり、川の流路であったところである。

第3は、烏川、碓氷川の西に展開する丘陵地である。岩野谷丘陵と呼ばれている標高200m～250m位の比較的低い丘陵地帯であり、地質年代の第三紀に堆積されてできたものである。

本遺跡は、前橋伊勢崎台地上の微高地の上にあり、高崎市の中心部にあたる高松町に所在する。約千数百メートル東には、南北に長く带状に、前橋伊勢崎台地上の後背湿地を控えている。約200m西に国道17号と烏川が、約900m東にJR高崎駅がある。本遺跡地周辺は、高崎音楽センター、国立高崎病院、高崎市役所、日本たばこ産業、NTTなどの立ち並ぶ官庁街となっている。

2. 遺跡の歴史的環境

本遺跡の周辺には、県内最古の方形周溝墓及び古代の住居跡を検出した遺跡や高崎城関係の遺跡、和田城櫓跡などがある。弥生時代から現代に至るまで、たくさんの人々が築いてきた歴史の痕跡が窺える。

特にその中でも、中世から近世（和田城から高崎城）にかけての遺構が色濃く残っていると見えよう。和田城は、1428年に和田義信が、烏川の崖上に城を築いたのが始まりと言われている。現在、当時の名残りをとどめているのは櫓跡のみである。この地にはその後、井伊直政が、1598年幕令により、箕輪から城を移し高崎城を築城した。現在も、三ノ丸の堀や土塁、乾櫓、東門などが、当時の面影を忍ばせている。

これらのことからわかるように、この地は、古代から、多くの人々の生産の場であり生活の場であった。また、西側に烏川の岸壁を控えた要害の地であるとともに、中世に鎌倉街道が、近世に中山道や三国街道が通る要衝の地でもあった。

3. 周辺の遺跡

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 高崎城Ⅹ（梅ノ木郭）遺跡 | 9 高崎城Ⅷ（追手門）遺跡 |
| 2 高崎城Ⅰ遺跡 | 10 高崎城Ⅸ（二ノ丸及び三ノ丸）遺跡 |
| 3 高崎城Ⅱ遺跡 | 11 高崎城Ⅺ遺跡 |
| 4 高崎城Ⅲ（坪の榊形）遺跡 | 12 高崎城下町遺跡 |
| 5 高崎城Ⅳ（坪の榊形、三ノ丸）遺跡 | 13 桧物町遺跡 |
| 6 高崎城Ⅴ（東門及び三ノ丸）遺跡 | 14 和田城櫓跡 |
| 7 高崎城Ⅵ（三ノ丸）遺跡 | 15 住吉町Ⅰ遺跡 |
| 8 高崎城Ⅶ（三ノ丸）遺跡 | 16 竜見町遺跡 |

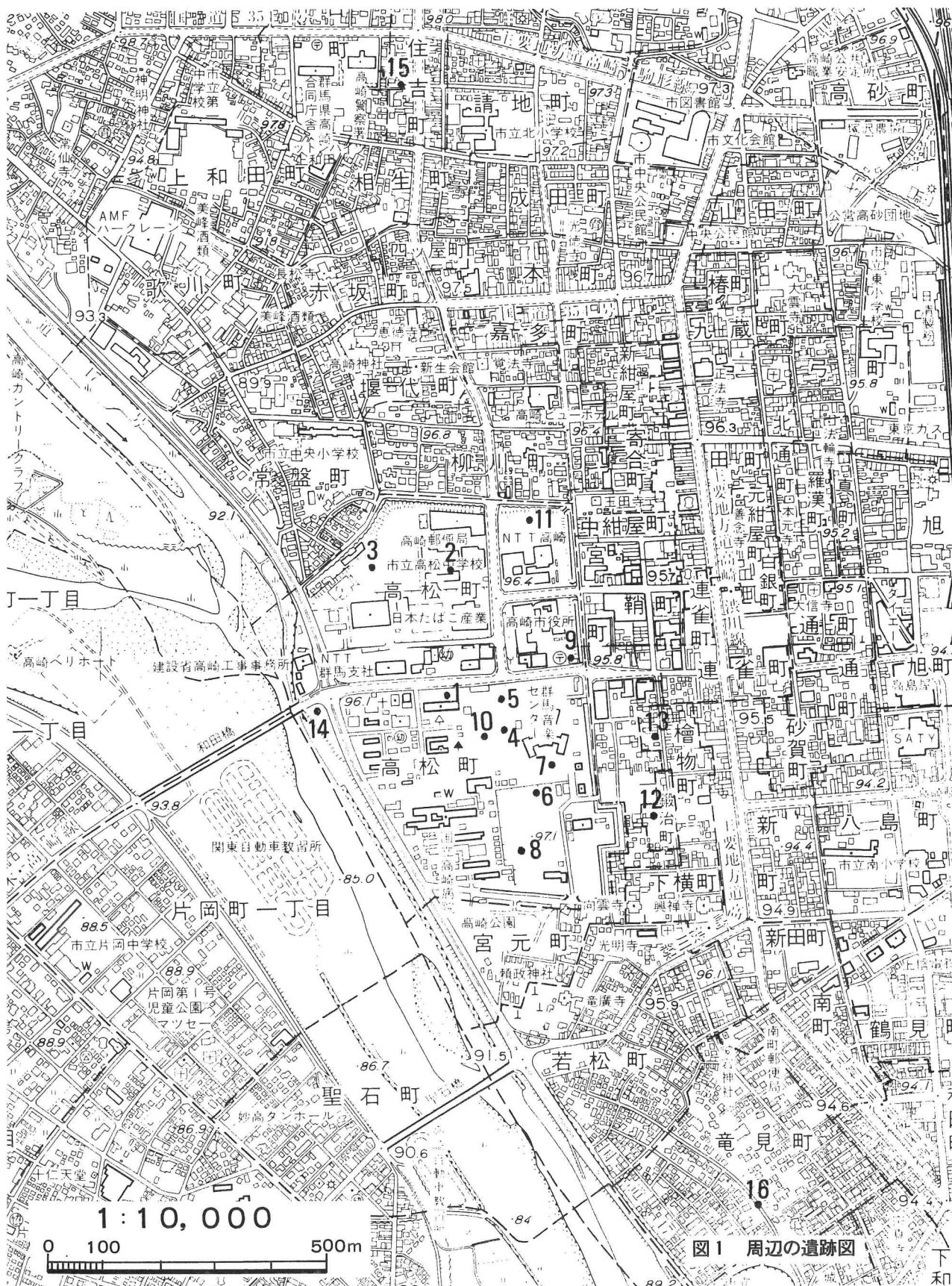


図1 周辺の遺跡図

第2章 経 過

第1節 調査の概要

1. 調査の方法

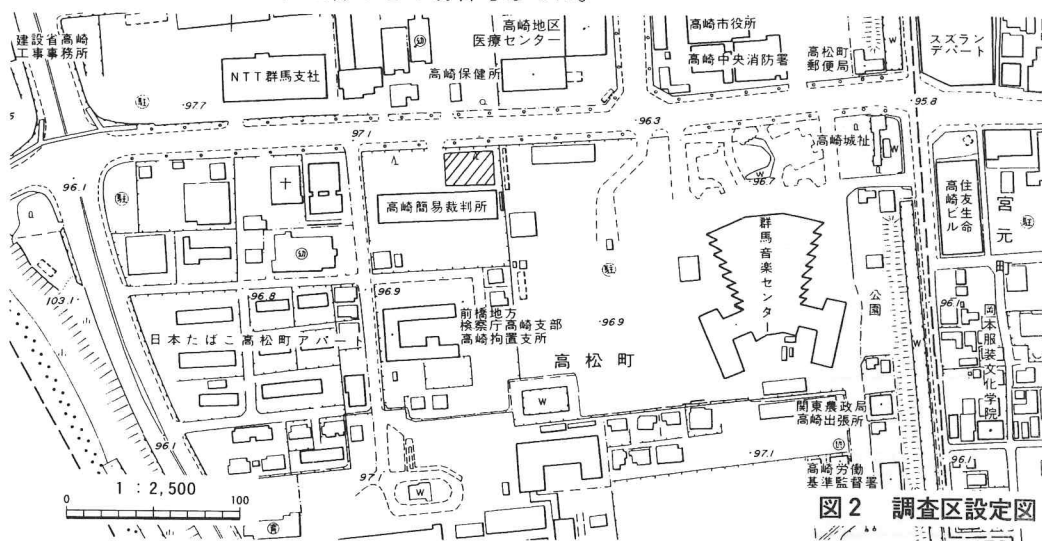
本遺跡は、近世には高崎城梅ノ木郭の中に位置し、近代には15連隊の兵営があった区域である。従って当然、高崎城や15連隊に関連した遺構の検出が考えられた。遺構の連続性や関連性なども含めて、今までに調査してきた高崎城の各遺跡の成果を参考にして、発掘調査の準備を進めた。

まず最初に、コンクリート剥ぎやブロック壊しなど、遺跡内もしくは遺跡周辺にある大型障害物の撤去を重機を使用して行い、具体的な発掘調査への段取りをした。その後、重機による表土剥ぎを行い、遺構確認作業及び精査へと入った。

遺構の検出にあたっては、近世の遺構検出が予想されたために、2面調査を想定した。しかし、調査の過程で、近世遺構のないことが確認できたので、一面調査へと変更し、最終的には関東ローム層を遺構認面とした。

基準点については、国土座標Ⅸ系に従って、調査区域北西隅の $X=35920$ 、 $Y=-74380$ を基点としたグリッドを設定した。調査用グリッドは10mを1単位とするメッシュを組んだ。グリッドの名称は、北西隅の交点の名称をあてることとし、その呼称については、北から南へは「A B…」の順にアルファベットで、西から東へは「0 1 2…」の順に数字で標記することとした。

遺構の測量については、平面図は平板測量による40分の1を、エレベーション・セクションについては20分の1を原則とした。但し、遺構検出状況によっては、平面図が20分の1、エレベーション・セクションが10分の1の場合もあった。



2. 調査の経過

1991年8月上旬
発掘調査に関して、東京高等裁判所職員と協議

9月中旬
前橋地方家庭裁判所高崎支部職員と現地発掘についての打ち合わせ

9月下旬
本遺跡の調査準備に入る。調査手順等を検討する

10月1日～2日
ブロックやコンクリートなどの大型障害物の撤去

10月3日～5日
重機導入。掘削開始（表土掘削）。

10月上旬
遺構確認作業・精査を開始（SK1）
本日より作業員を導入

1991年10月中旬
遺構確認作業・精査（SK1、6など）
10月下旬
平面図等実測開始
11月上旬
遺構確認作業・精査（SK17、18、19、20、21、22、SD2など）
11月中旬
遺構確認作業・精査（SK25、26、29、33、SD1など）
11月下旬
遺構確認作業・精査（SK12、SE3など）
空中写真撮影。平面図等実測継続
12月上旬
平面図等実測継続。ローム層下調査。
12月中旬
埋め戻し作業

3. 基本土層の概要

I	I 暗褐色土 埋め土
II	II 褐色土 やや乾燥ぎみの弱粘質土。炭化物を若干含む。
III	III 黄褐色土 粗砂を含むがしまりは良い。全体にA軽石が混入。
IV	IV 褐色土 ローム粒を多量に含みしまりが良い。不明軽石粒が若干混入。
V	V 黄褐色土 ローム漸移層
VI	VI 黄色土 ローム層

図3 基本土層柱状図

4. 検出遺構と出土遺物の概要

検出遺構は、次の通りである。

土坑及び池状遺構・36基、溝及び溝状遺構・3条、井戸・3基、掘立柱建物・1棟、ピット・16基

(1)土坑

検出した遺構の年代は、大きくは、中世と近世と時期不明の三種類に分類できる。

- 中世の遺構について、平面形状でみると方形か円形を基礎にしたものがほとんどである。特殊なものとして、石組みの遺構と池状の遺構とを各一基ずつ検出した。池状遺構については、最大部で、東西上端幅・約8m、南北上端幅・約12m以上、深さ2.5mと大変大きい。宝篋印塔や板碑などが出土しており、土の堆積状況・地下水面を貫いている掘り方・遺物投棄状況・遺構の規模などからの面から推測すると、池的な性格を帯びた遺構の可能性が考えられる。

主な出土遺物は、軟質陶器・土師質土器・板碑・石臼などであるが、破片が多く、完形品は少ない。

- 近世の遺構についても、平面形状は中世と同様である。

ほとんどの遺構が瓦を一括投棄した穴であり、瓦以外の遺物は、陶磁器が数点程度である。

(2)溝及び溝状遺構

検出した遺構の年代は、2条が中世、1条が近世と思われる。

中世の3号溝は、西北西から東南東へ流れ、調査区西側でSK25と切り合っている。SK25に切られた状態になっており、時期はSK25よりも古い。

遺物は、15世紀後半から16世紀前半にかけての土師質土器、播鉢、鍋などが出土している。

(3)井戸跡及び掘立柱建物跡

検出した井戸跡・掘立柱建物跡は、中世の遺構と思われる。

- 井戸の平面形状は円形であり、底部はほぼ平底、断面形状は筒状のものとロート状のものとに分けられる。

1号井戸については、地盤の脆弱さを補うために、上部から中央部にかけて石がしっかりと裏込めしてある。径は2.3mから2.4mであり、深さは約3.8mである。

3号井戸については、比較的壁が堅固なためか、素掘りになっている。径は約0.9mであり、深さは約3mとやや小型である。

1号井戸・3号井戸ともに、遺構埋め土にB軽石を含み、A軽石は認められない。遺物は板碑・五輪塔・くぼみ石・15世紀の鍋や鉢などが出土した。近世においては、1号井戸・3号井戸検出地点は、梅ノ木郭堀の土塁下に位置していたと考えられる。

このようなことから、1号井戸、2号井戸ともに、中世末から近世初頭にかけて埋没したと推定される。

4.その他

フィゴの羽口が6点と、鋳滓が、かなりの量、出土している。出土地点は、西はSK25付近から、東はSD2付近と広範囲にわたっている。出土遺物に関連しているのではないかと推定される焼土跡も検出されており、近くに鍛冶場のあった可能性も考えられる。

高崎城梅ノ木郭遺跡 調査区全体図



第3章 結 果

第1節 遺 構

1. 25号土坑



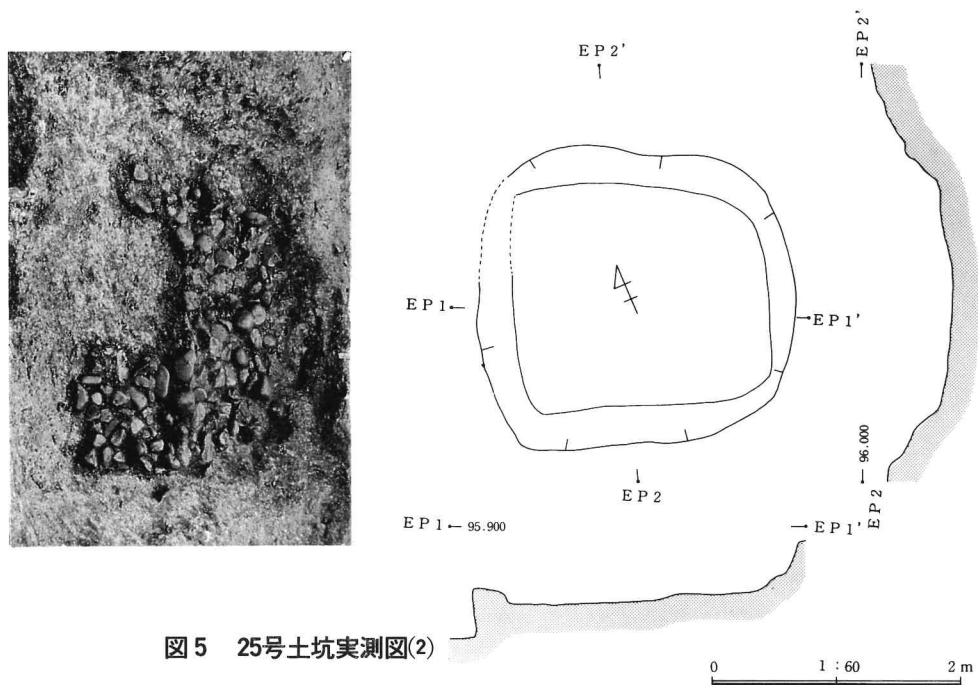
図4 25号土坑実測図(1)

検出位置は、調査区西側SK26の北側である。ローム直上、黄褐色土面で確認された。

規模は、東西上端幅約2.5m、南北上端幅約2.4m、深さ（地面を掘り下げた部分）0.34m～0.46mである。掘り下げたあとに、周囲を囲むように石が積み上げてあった。上部の石組みは、崩壊した状態になっており、掘り下げ面からの残存状態は、良いところで約0.5m、悪いところで約0.15mである。特に東側と北側の残りが良い。まず、まわりの地表面をなだらかな方形状に掘り下げたあとに、石を積み上げていったものと思われる。底部は、ほとんど平坦であるが、若干、南側と東側が高くなっている。しっかりと底部を固めてから、小型の礫を全体に敷きつめていったものと考えられる。

主軸方位はN-15°-Wを向いている。16世紀前半から後半にかけての軟質陶器（主に鍋）や土師質土器（主に皿）、石臼、板碑など、中世後半に使用されたと思われる遺物が出土している。性格については未判明であるが、妙楽寺遺跡や一乗谷遺跡などで、複数の石組み遺構が検出されている。それらのほとんどは、水溜め、便槽、貯蔵庫の範ちゅうに属するものである。本遺構についても、つくられた時期や、遺構のつくり、出土遺物などから推測すると、同様なことに使用された遺構か、もしくは、類似した遺構かと考えられる。

本遺構は西側で、中世溝（SD3）と切り合っている。レベルをみると、SD3がSK25の中に流れ込む形態を呈するが、別遺構と思われる。土の堆積状況を見ると、SD3を埋めて、底部に石敷をしてから、SK25を作り上げた形跡が窺える。このような切り合いや出土遺物などから推測して、SK25は、SD3を埋めた直後の中世末に作られたものと考えられる。



2. 6号土坑

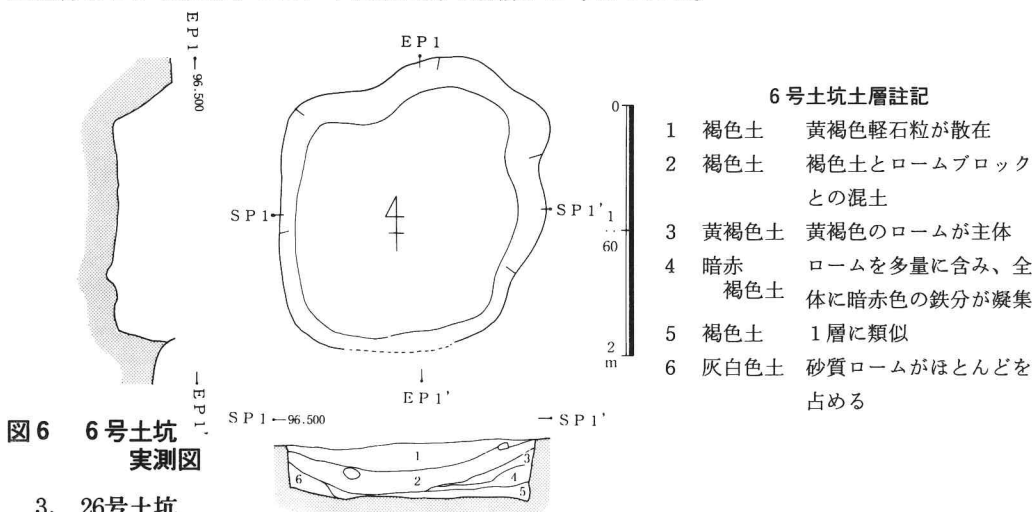
調査区東側、SK 5 及び SE 1 の東側で検出された。遺構確認面は、ローム層直上の黄褐色土面である。

平面形状は、東西上端幅約 2 m、南北上端幅約 2.1 m と、ややくずれを方形状に呈する。北東部の突出部分については、その後の攪乱により広がった部分である。本土坑の北側上端幅線は突出せずに、ほぼ真すぐに東側上端幅線と、つながるものと思われる。深さは、約 0.4 m 程であり、掘り方は垂直に近い状態に掘り下げられてある。底部は多少の凹凸はあるが、ほとんど平坦に近い。主軸方位は、 $N-2^{\circ}-W$ を示す。

遺物は、石臼や15世紀の土師質土器皿などが出土している。

底部や壁をかなり丁寧に整形している様子があり、単なるゴミ捨て穴とは考えにくい、性格については不明である。

時期については、南側で検出された SK 5（中世遺構）に上端幅線が切られていることや出土遺物などから推測すると、中世末以前の遺構かと考えられる。



3. 26号土坑

調査区西側中央付近で検出された。遺構確認面は、ローム層直上の黄褐色土面である。平面形状は、東西上端幅約 3.6 m、南北上端幅約 2 m と、東西に長い方形状を呈する。遺構北側中央付近から南に向けて、長さ 1.6 m 程のスロープ状の緩斜面が形成されている。深さは約 1 m であり、東西壁面と南壁面は、ほぼ垂直の掘り方になっている。

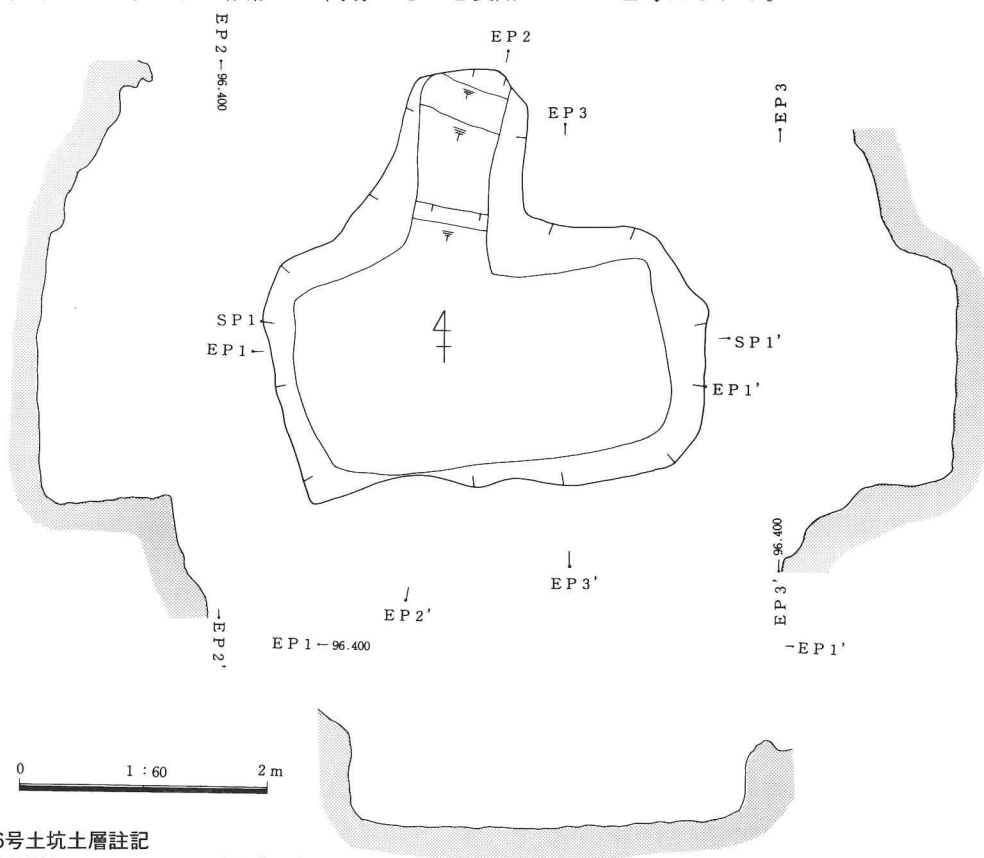
土の堆積状況は、下層は二次堆積となるローム土が大半を占め、中層から上層にかけては、かなり多量の小礫が流れ込んでおり、B 軽石を若干含んでいる。

長軸方位は、 $N-105^{\circ}-W$ を示す。出土遺物は、16世紀の鍋や鉢、くぼみ石などの中世末の遺物が、ほとんどである。

北側で検出されたスロープ状の坂は、水平面に対して約20度の傾きをもった緩斜面になっている。本遺構と一体となるものであり、本遺構に降りていくための入口と考えられる。

形状や掘り方などの特徴から貯蔵庫的な性格を有する地下室状遺構に類似したものと推測される。

本遺構の内部や周辺で、柱穴を検出することはできなかった。また、上部に平材を寝かすことのできる段差が、確認できる。これらのことから推測して、本遺構の覆いについては、平材か、もしくは、それに類似した簡易なものを使用していたと考えられる。



26号土坑土層註記

①黄褐色土 しまり良く炭化物を若干含む
②暗灰色土 砂質ローム③暗灰色土 2層に類似、鉄及凝集が顕著④灰褐色土 砂質ローム⑤黄褐色土 しまりが良いが粘性が劣る⑥暗褐色土 ロームと砂粒との混土⑦極暗褐色土 しまりの良い粘質土⑧暗黄褐色土 粗砂が主体⑨暗褐色土 YPを若干含むシルト質状ローム⑩黄色土 粘質性ローム⑪褐黄色土 砂質ローム⑫白黄色土 粘質性ローム。下層に小礫が多量に混入

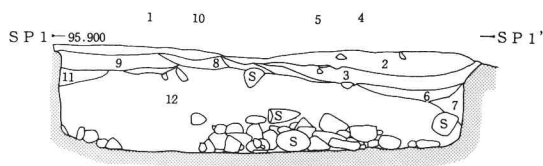
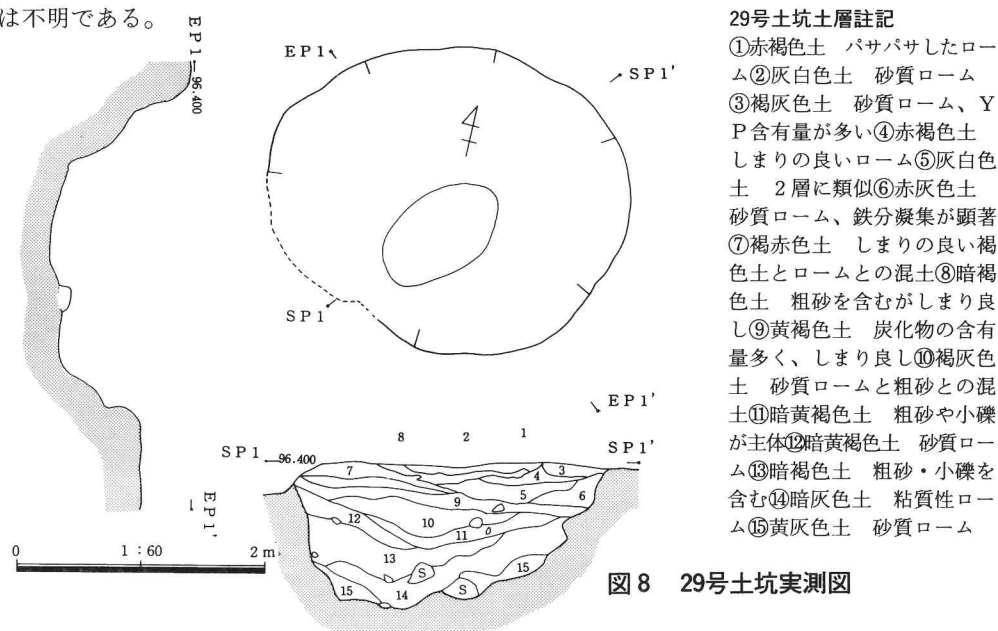


图7 26号土坑实测图

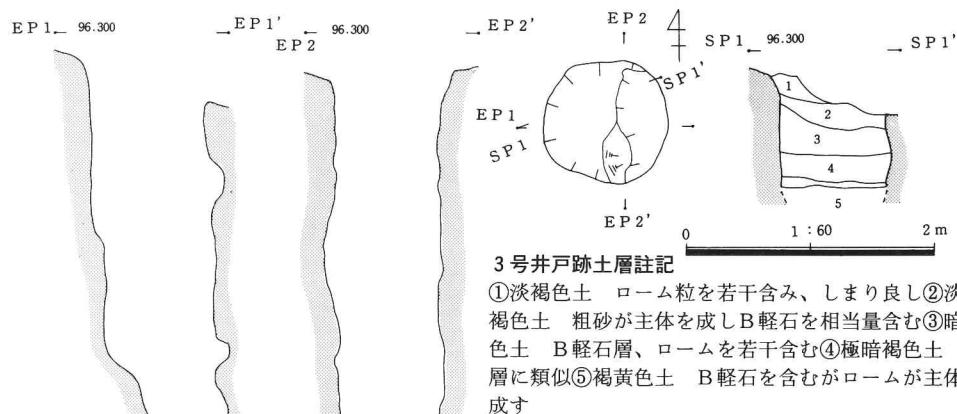
4. 29号土坑

調査区東端やや南よりで検出された。遺構確認面は、ローム層直上の灰褐色土面である。

平面形状は、東西上端幅約2.9m、南北上端幅約2.4mと、やや東西に長い楕円形状を呈する。深さは、最大部が1.1mであり、南側がやや深く掘り下げられた状態になっている。東壁・西壁・北壁が、若干急な程度の類似した掘り方なのに対して、南壁だけ、かなり垂直に近い掘り方になっている。砂質ロームが主体を成しているので、壁は大変脆く崩れやすい。主軸は、ほぼ真北を示している。遺物は、布目瓦や須恵器、播鉢、鍋など、古代から中世にかけて幅広く出土している。すべて破片であり、流れ込み状態の遺物がほとんどである。時期や性格については不明である。



5. 3号井戸跡



第2節 遺 物

1. 須恵器・軟質陶器等

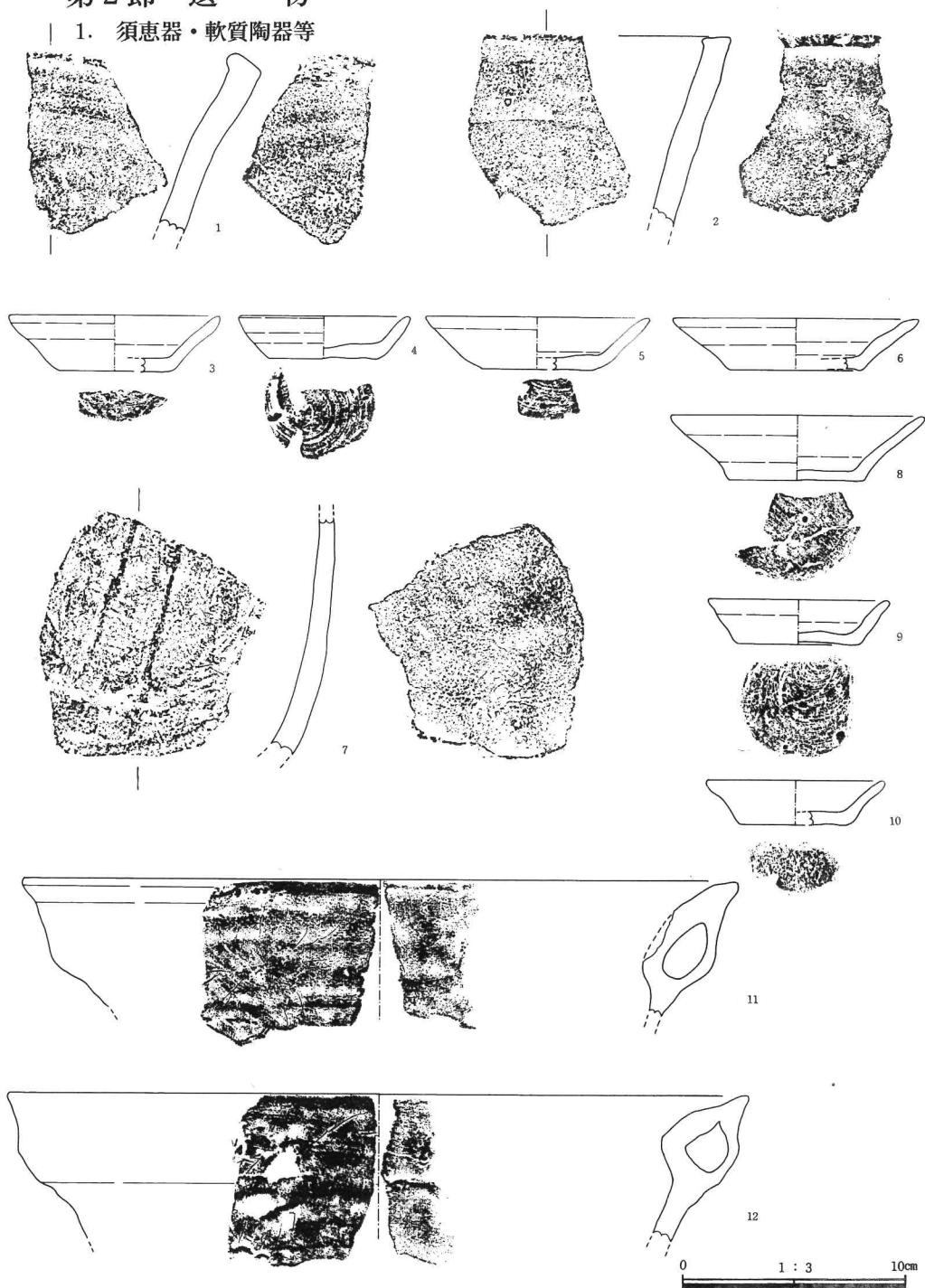


図10 須恵器・軟質陶器等実測図(1)

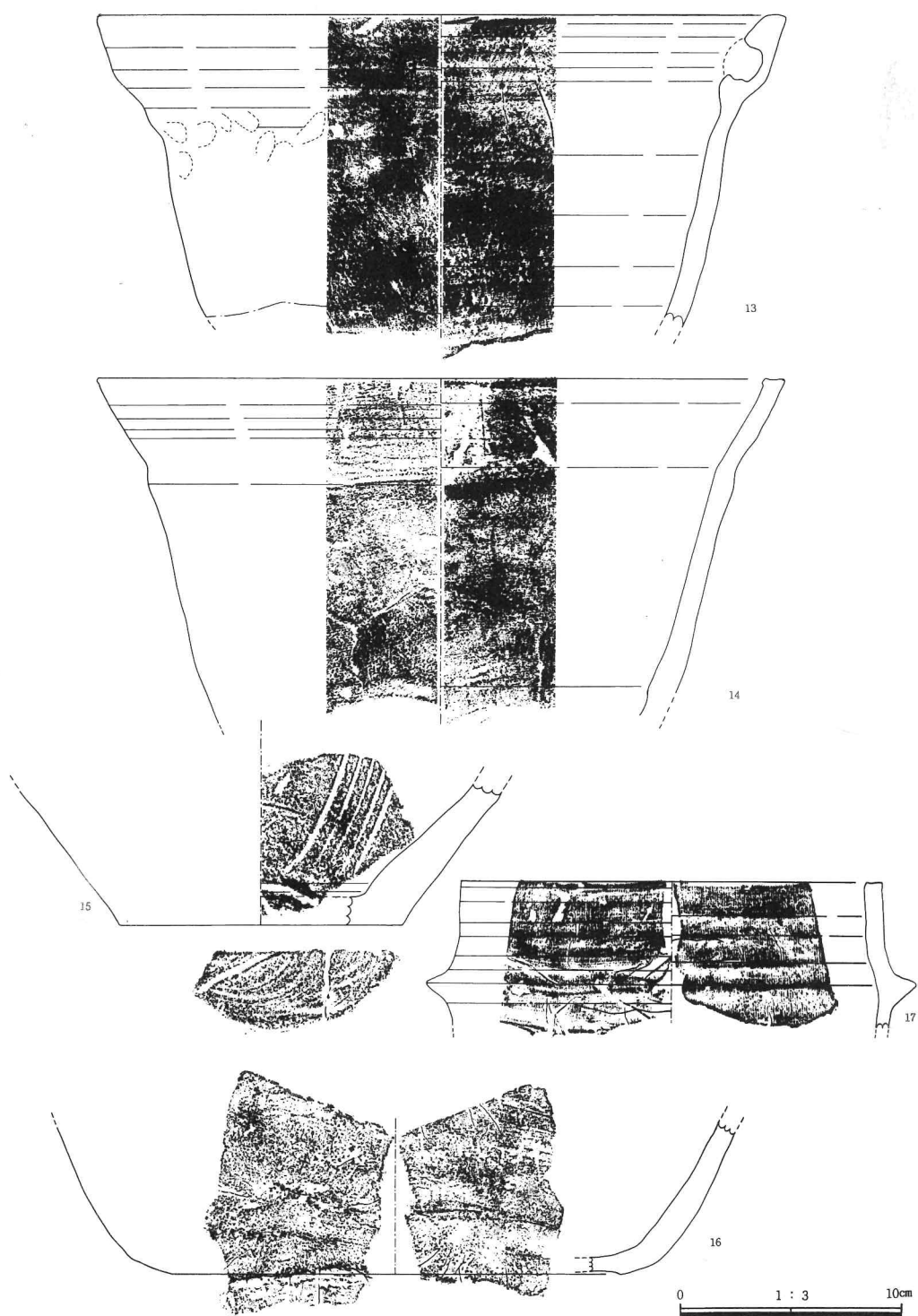


図11 須恵器・軟質陶器等実測図(2)

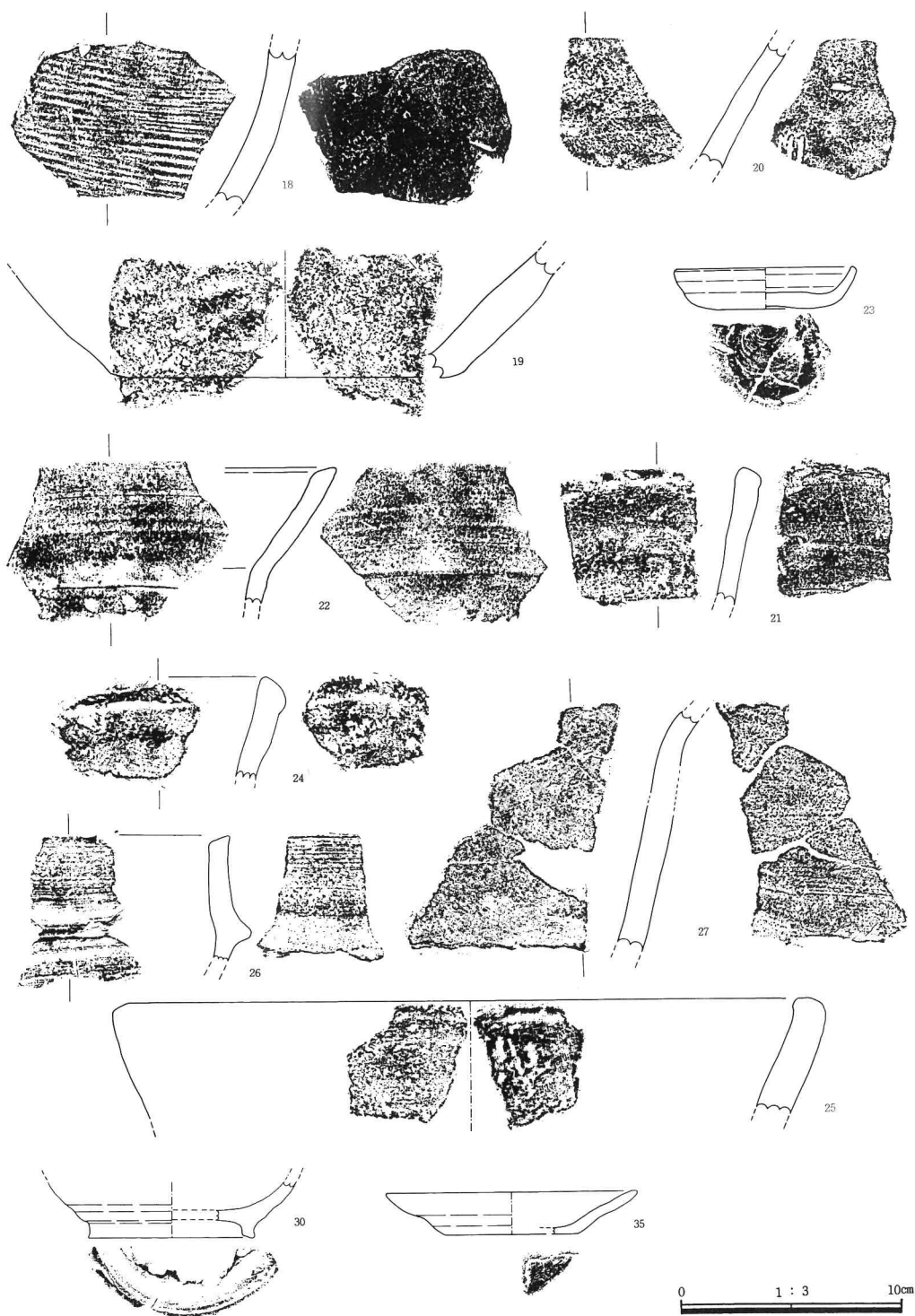


図12 須恵器・軟質陶器等実測図(3)

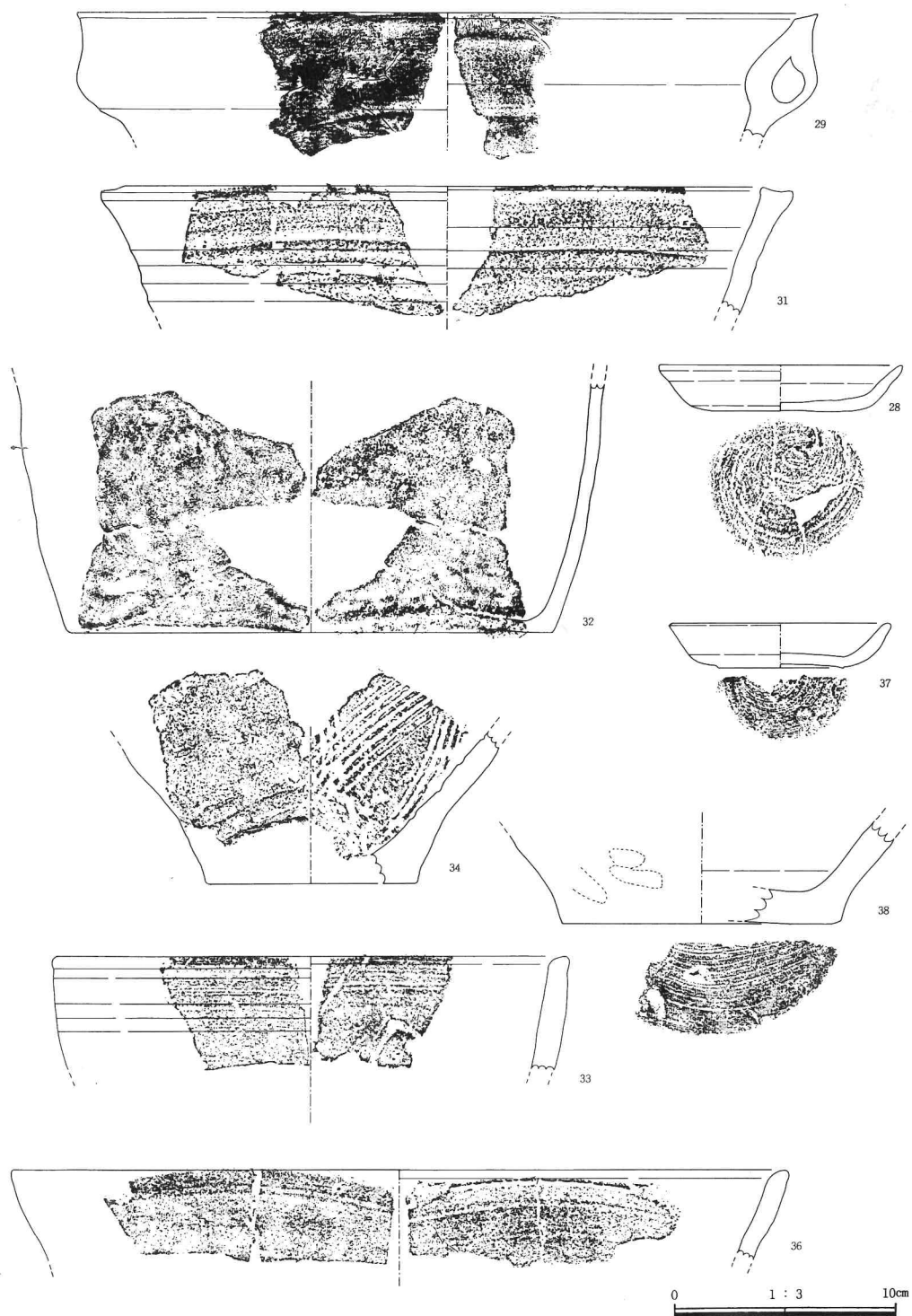


図13 須恵器・軟質陶器等実測図(4)

2. 石造物

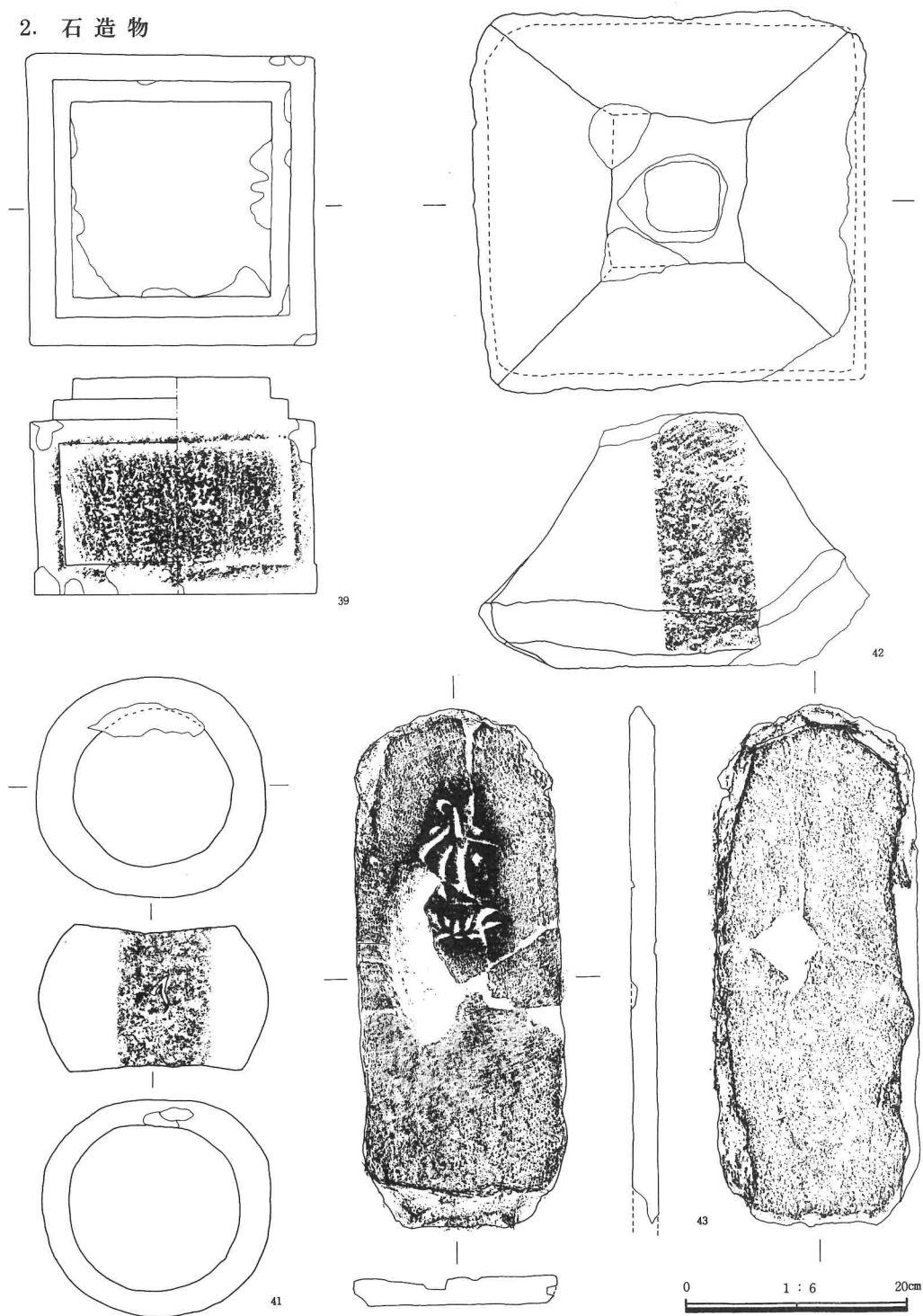


图14 石造物实测图

3. 石 白

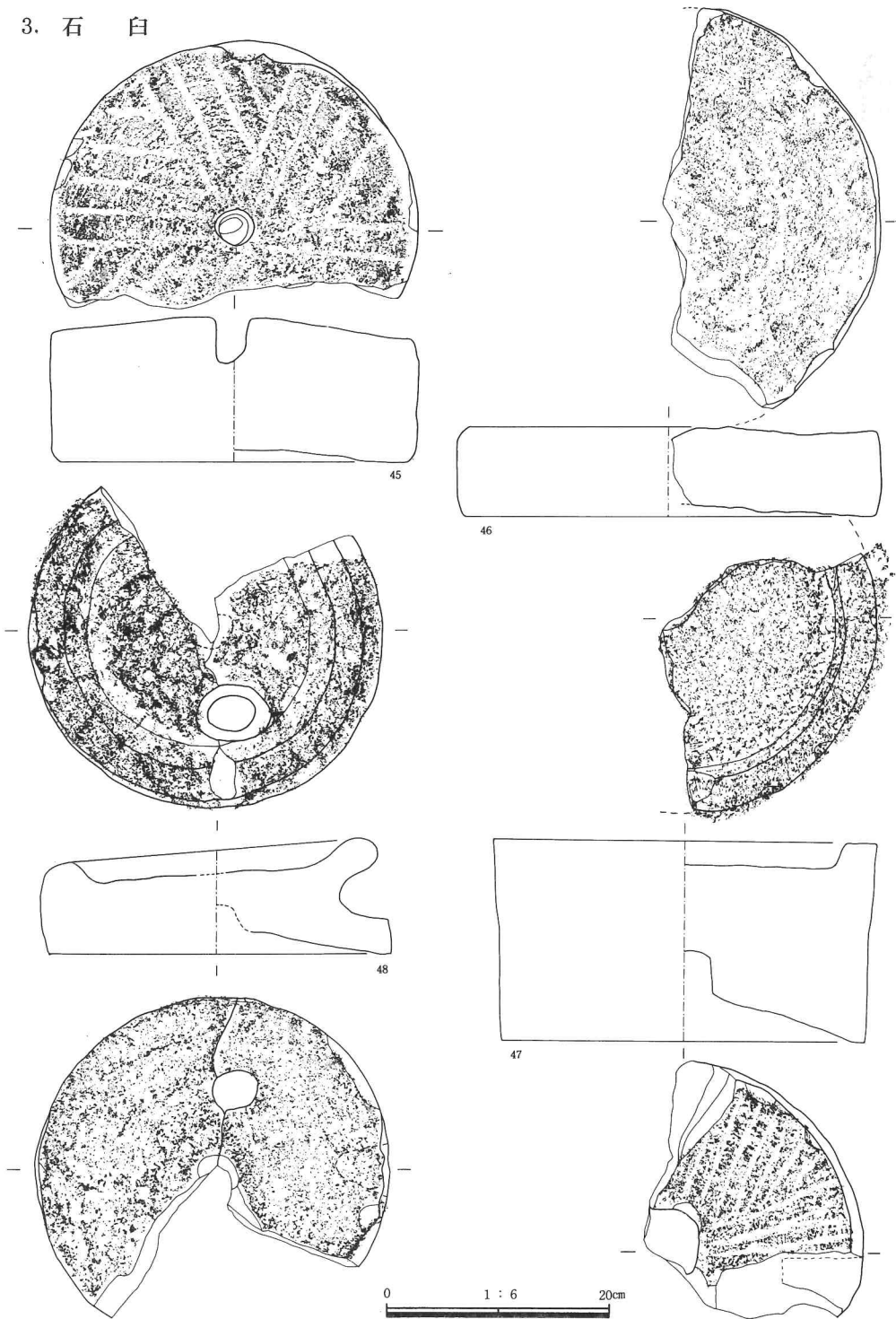


图15 石白实测图



图16 古錢拓影圖

5. 瓦

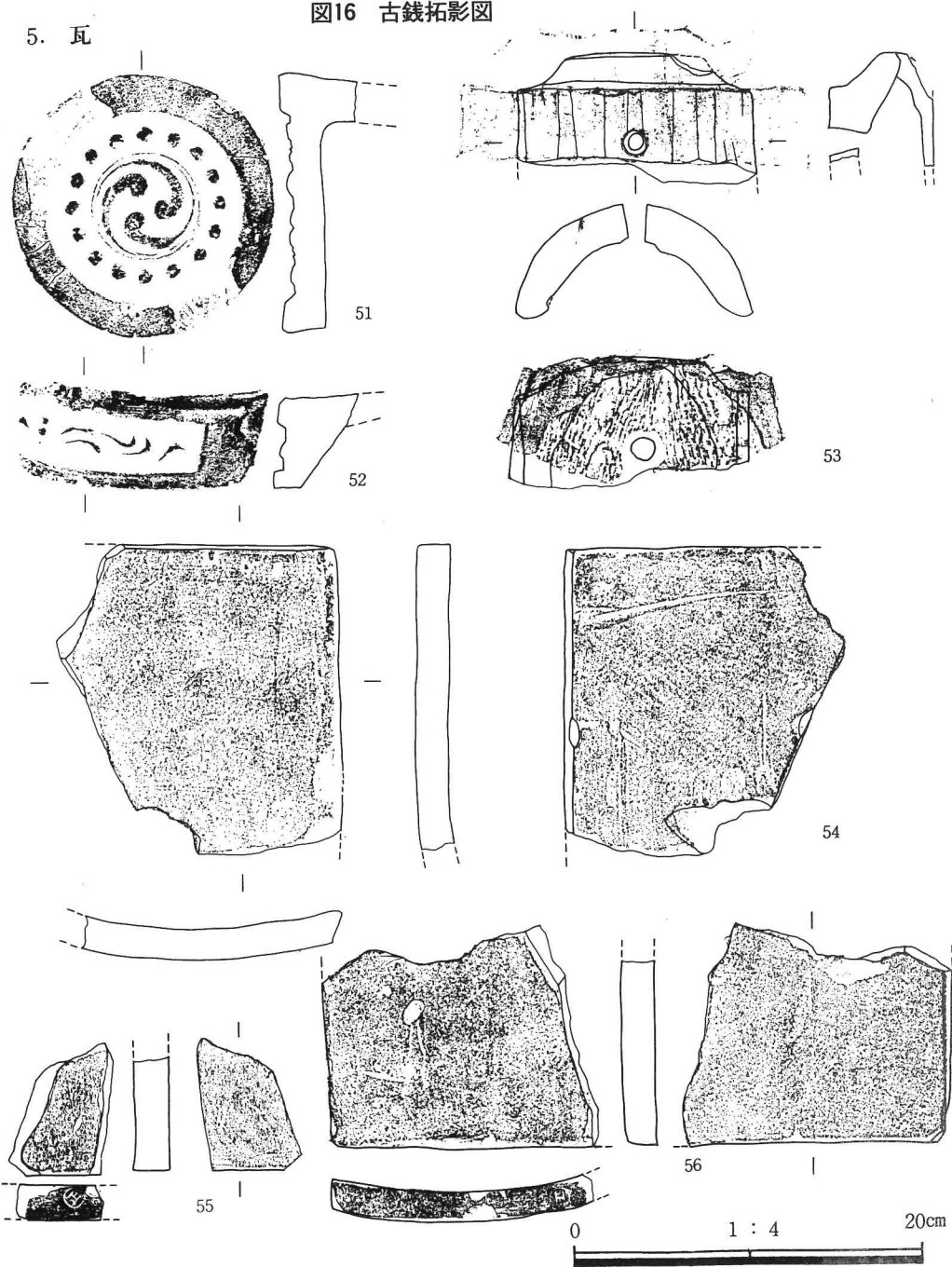


图17 瓦実測圖

6. 陶磁器

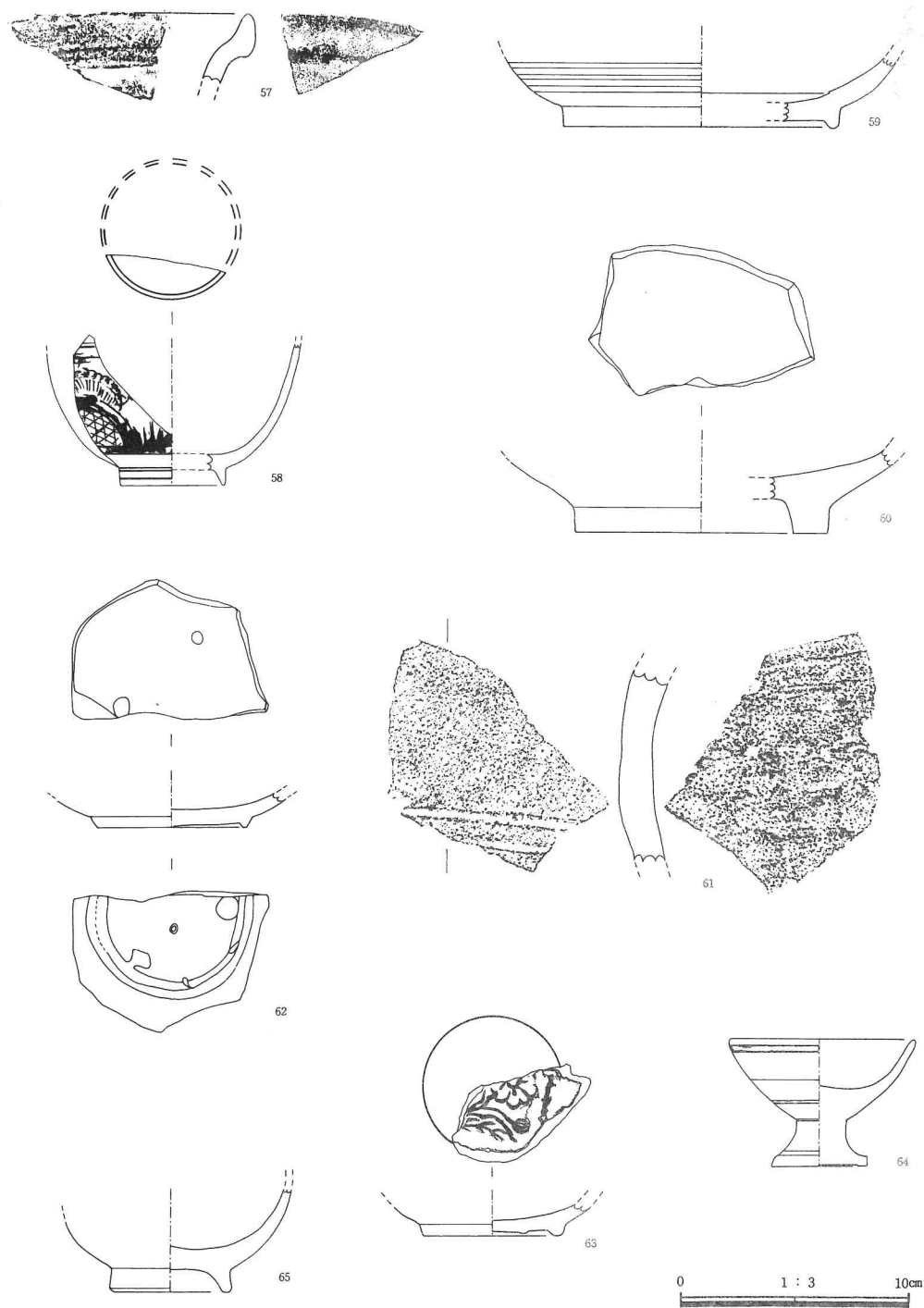


图18 陶磁器实测图

7. 石製品

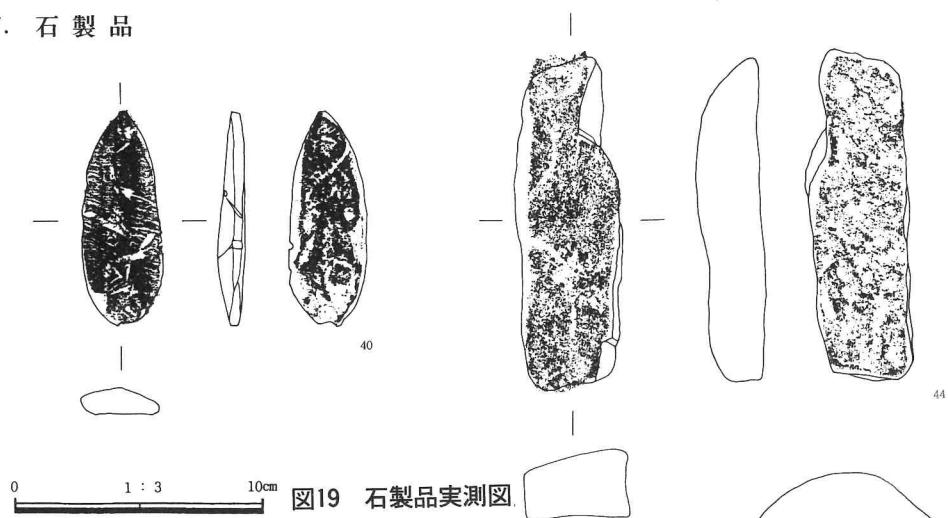


図19 石製品実測図

8. その他の遺物

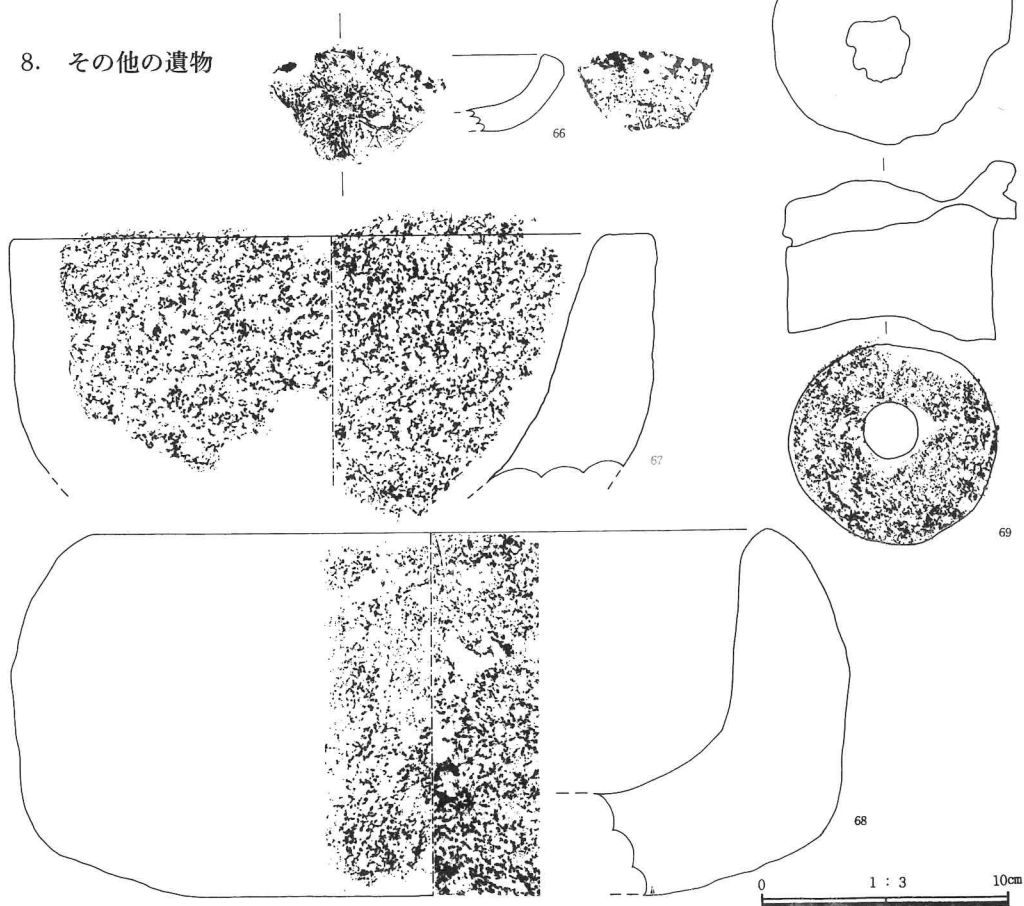


図20 その他の遺物実測図

9. 遺物観察表

須恵器・軟質陶器等観察表

番号	遺構	器種	口=口径cm 底=底径cm 高=器高cm	①胎土 ②焼成 ③色調	形態 / 調整の特徴	①推定年代 ②その他
1	S K 5	軟質陶器 槽鉢	口 一 底 一 高 一	①雲母・輝石・細礫を若干含む。 ②酸化焰(燻焼成)・やや硬質。 ③内外面暗灰色、断面灰色。	体部から口縁部にかけてやや外反する/ 口縁部回転横ナデ・口唇部を折り返した 形跡。	①15C後 ②口縁部・紐つくり・内面に使用 痕。
2	S K 5	軟質陶器 鉢	口 一 底 一 高 一	①長石・白色粒・細礫を若干含む。 ②酸化焰(燻焼成)・やや軟質。 ③内外面暗灰色。	体部から口縁部にかけてゆるやかに外反・ 口唇部上面が弱い凹状を呈す/口縁部回 転横ナデ・外面に指頭状の凹凸・口唇部を 折り返した形跡?	①15C後 ②口縁部・紐つくり・内面に使用 痕。
3	S K 6	土師質土器 皿	口(9.4) 底(5.0) 高 2.5	①輝石・砂粒。 ②酸化焰・やや軟質。 ③橙褐色。	底部から開きぎみに立ち上がったあと口 縁部でゆるやかに外反/回転クロコナデ (回転方向不詳)底部糸切り後なで。	①15C末 ②主に胴部。
4	S K 6	土師質土器 皿	口(7.6) 底 6.0 高 1.9	①黒色粒・砂粒。 ②酸化焰・やや軟質。 ③赤褐色。	口縁部で多少内彎する/右回転クロコナ デ・底部糸切り・特に内面のナデが丁寧。	①15C後 ②胴部及び底部。
5	S K 6	土師質土器 皿	口(10.0) 底(5.0) 高 2.6	①輝石・砂粒。 ②酸化焰・やや硬質。 ③純褐色。	口縁部でわずかに外反/回転クロコナデ・ (回転方向不詳)・底部糸切り。	①15C後 ②主に胴部。
6	S K 6	土師質土器 皿	口 11.0 底(6.0) 高(2.3)	①黒色粒・細砂。 ②酸化焰・やや軟質。 ③橙褐色。	体部下方から開きぎみに立ち上がり口縁 部がわずかに外反、全体に厚ぼったい/回 転クロコナデ(回転方向不詳)底部糸切り。	①15C末 ②胴部。
7	S K 10	軟質陶器 鍋	口 一 底 一 高 一	①砂粒・細礫を含むが緻密。 ②還元焰(内面燻焼成)・やや硬 質。 ③暗灰色。	底部外面に押圧痕/内面にナデ。	①15C前 ②底部。
8	S K 25	土師質土器 皿	口(11.0) 底(6.0) 高 2.9	①輝石・砂粒。 ②酸化焰・やや軟質。 ③橙褐色。	底部からやや開きぎみに立ち上がり、体 部中央付近から、かなり外反する/回転 クロコナデ(回転方向不詳)磨耗により、 糸切り痕は散見できず。	①15C後 ②主に胴部。
9	S K 25	土師質土器 皿	口(8.2) 底(5.5) 高 2.0	①輝石・雲母・細粒砂。 ②酸化焰・やや軟質。 ③暗橙褐色。	底部から口縁部までやや開きながら、ほ ぼまっすぐに立ち上がり 体部中央付近 に綾をもつ/左回転クロコナデ・底部糸 切り・外面はやや磨耗。	①15C中 ②主に底部。
10	S K 25	土師質土器 皿	口(8.0) 底(5.0) 高 2.0	①輝石・砂粒。 ②酸化焰・やや軟質。 ③橙褐色。	体部中央付近よりかなり外反/回転クロ コナデ(回転方向不詳)底部糸切り後篋削 りか?外面はやや磨耗。	①15C後 ②外面に気泡をみ る。

11	S K 25	軟質陶器 鍋	口 — 底 — 高 —	①黒雲母・黒色粒・長石。②酸化 焰(燻焼成)・やや軟質。③外面灰 黒色・内面及び断面橙褐色。	口縁部は平坦で内傾し、外側に突出する/ 内外面口縁部回転横ナデ・耳の装着は丁 寧にナデ消す。	①16C前 ②内耳がつく・口 縁部。
12	S K 25	軟質陶器 鍋	口 — 底 — 高 —	①黒雲母・黒色粒・長石。②酸化 焰(燻焼成)・やや軟質。③外面灰 黒色・内面及び断面橙褐色。	口縁部は平坦で内傾し、外側に突出する/ 内外面口縁部回転横ナデ・耳の装着は丁 寧にナデ消す。	①16C前 ②内耳がつく。
13	S K 26	軟質陶器 鍋	口 31.0 底 — 高 14.0	①輝石・ベンガラ・細砂・細礫若 干含む。②酸化焰(燻焼成)・やや軟質。 ③外面灰黒色・内面断面淡灰黄色。	胴はやや丸味を帯びながら、口縁部から ゆるやかに外反する。内稜は弱い凹面/ 体部方向に指頭状の凹凸・口縁部回転横 ナデ・胴下部篋削り。	①15C前 ②内耳がつく・口 縁部・胴部・紐つ くり。
14	S K 26	軟質陶器 鍋	口 (31.0) 底 — 高 (15.0)	①輝石・雲母・細砂・細礫を若干 含む。②酸化焰(燻焼成)・やや硬質。 ③内外面暗灰色・断面淡灰褐色。	体部から口縁部にかけて外反する。口縁 端部は、ゆるやかな凹状を呈す。内稜は弱 い凹面/口縁部回転横ナデ・体部下方に 雑な削り・体部上方に指頭状の凹凸痕。	①15C前 ②内耳がつく・口 縁部・胴部・紐つ くり。
15	S K 26	軟質陶器 播鉢	口 — 底 12.8 高 —	①輝石・長石・細礫。 ②環元焰・硬質。 ③灰色。	底部からやや開きぎみに真すぐ立ち上 がる/胴部横ナデ・底部糸切り・櫛目は1単 位5本。	①15C ②内面下耳に使用 痕。
16	S K 26	軟質陶器 鍋	口 — 底 — 高 —	①黒雲母・輝石・細礫若干含む。 ②酸化焰。 ③橙褐色。	底部から体部にかけて丸味を帯びながら 立ち上がる/胴内面回転横ナデ・底部ナ デ・体部下方に篋削り。	①15C後～16C前 ②胴下部・底部・紐 つくり。
17	S K 29	羽 釜	口 19.0 底 — 高 —	①輝石・石英・雲母。 ②環元焰・やや硬質。 ③灰色。	鏝から、ほぼ真すぐ立ち上がる・口縁部内 面に輪積み痕/口縁部回転横ナデ・鏝は 接合のあと横ナデ。	①9C後～10C前 ②口縁部・紐つく り。
18	S K 29	須恵器 甕	口 — 底 — 高 —	①黒色粒・雲母若干含む。 ②酸化焰(燻焼成)。 ③灰色。	一/外面平行にたたき目痕・内面ナデ・一 部あて痕あり。	①8C ②胴部。
19	S K 29	軟質陶器 播鉢	口 — 底 — 高 —	①白色粒・雲母若干含む。②酸化 焰(燻焼成)・やや軟質。③内外面 灰黒色・断面にぶい橙褐色。	一/胴部横ナデ・櫛目は1単位3本以上。	①15C後 ②胴部内面に使用 痕。
20	S K 29	軟質陶器 播鉢	口 — 底 — 高 —	①輝石・黒雲母・白色粒若干含む。 ②環元焰・硬質。 ③暗灰色。	外面は細かな凹凸があり、肉厚/雑な横 ナデ・底部篋ナデ。	①15C ②胴部・内面に使 用痕。
21	S K 29	軟質陶器 播鉢	口 — 底 — 高 —	①白色粒・雲母若干含む。 ②環元焰・やや硬質。 ③灰色。	外面は細かな凹凸があり、やや肉厚/口 縁部はまっすぐ伸びる・内外面口縁部雑 な横ナデ。	①15C ②口縁部。
22	S K 29	軟質陶器 鍋	口 — 底 — 高 —	①雲母・白色粒若干含む。 ②酸化焰(燻焼成)・やや軟質。 ③内外面灰黒色・断面橙褐色。	口縁端部は平坦で内傾し、若干外側に突 出、内稜は弱い凹面/口縁部回転横ナデ。	①16C前 ②口縁部。
23	S K 35	土師質土器 皿	口 8.2 底 4.2 高 1.8	①輝石・雲母。 ②酸化焰・やや硬質。 ③赤褐色。	底部からやや開きぎみに立ち上がり、体 部上方で内側に折れながら稜を作る/左 回転クロナデ・底部糸切り。	①近世? ②口縁部スス付着。

24	S K 35	軟質陶器 鉢	口 — 底 — 高 —	①雲母・ベンガラ・白色粒若干含む。 ②酸化焰・やや軟質。 ③灰褐色。	口縁端部は丸くなる／内外面に雑な横ナデ。	①15C前。 ②口縁部。
25	S E 1	軟質陶器 擂鉢	口 (32.0) 底 — 高 —	①輝石・長石・粗粒砂。 ②還元焰・硬質。 ③灰色。	口縁端部は、弱い凸面で内側に若干突出/ 口縁部横ナデ・外面に若干磨き。	①15C。 ②口縁部内面に使用痕。
26	S E 3	羽 釜	口 — 底 — 高 —	①黒色粒。 ②還元焰(燻焼成)・やや硬質。 ③灰色。	口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口唇部 でわずかに外反／鋸は接合のあと横ナデ。	①10C。 ②口縁部。
27	S E 3	軟質陶器 鍋	口 (40.0) 底 — 高 —	①輝石・粗砂。 ②酸化焰。 ③暗橙褐色。	胴部はゆるやかに内彎するカーブを描く/ 胴部回転横ナデ。	①15C以前。 ②胴部・内耳がつく。
28	S D 2	土師質土器 皿	口 (11.2) 底 6.0 高 3.0	①雲母・細粒砂。 ②酸化焰・軟質。 ③にぶい赤褐色。	胴部はやや開きながら直線的に立ち上がり 口縁部で小さく外反／左回転クロロナ デ・底部糸切り。	①近世?。 ②内面スス付着。
29	S D 2	軟質陶器 鍋	口 33.4 底 — 高 —	①黒雲母・ベンガラ・白色粒若干含む。 ②酸化焰(燻焼成)・やや硬質。 ③外面灰黒色・内面及び断面橙褐色。	口縁端部は、平坦で内傾し、外側に若干突 出／口縁部回転横ナデ・耳の装着はナデ 消す。	①15C後。 ②口縁部・内耳がつく。
30	S D 2	須恵器 壺	口 — 底 (7.5) 高 —	①黒雲母・白色粒・細礫若干含む。 ②還元焰。 ③灰色。	はりつけ高台／回転クロロナデ、体部下 方に若干削り。	①9C前。 ②胴下部・底部。
31	S D 3	軟質陶器 鍋	口 31.0 底 — 高 —	①輝石・雲母・白色粒。 ②酸化焰(燻焼成)・やや軟質。 ③外面灰黒色・内面及び断面赤 褐色。	口縁端部はゆるやかな凹状を呈し、内側 と外側に突出／口縁部回転横ナデ、外面 に小さな凹凸。	①15C後?。 ②口縁部。
32	S D 3	軟質陶器 鍋	口 — 底 22.0 高 —	①長石・雲母。 ②酸化焰(燻焼成)・軟質。 ③外面灰黒色・内面及び断面橙 褐色。	体部はやや丸味帯びながら立ち上がる・ 外面には細かな凹凸・平底／やや雑な横 ナデ、体部下方篋ナデ。	①16C前。 ②胴下部・底部。
33	S D 3	軟質陶器 鍋	口 (23.2) 底 — 高 —	①長石・雲母。 ②還元焰・硬質。 ③灰色。	口縁部はゆるやかな凸状を呈し若干外側 に突出／口縁部回転横ナデ。	①15C。 ②口縁部。
34	S D 3	軟質陶器 擂鉢	口 — 底 (9.6) 高 —	①雲母・ベンガラ・砂粒・細礫。 ②酸化焰(燻焼成)。 ③内外面暗灰色・断面暗橙褐色。	底部からやや開きぎみに立ち上がり、体 部下方から更に大きく外反する／外面横 ナデ・体部下方篋ナデ・櫛目は1単位7本。	①15C後。 ②内面に使用痕。
35	S D 3	土師質土器 皿	口 12.4 底 6.0 高 1.9	①黒雲母・ベンガラ。 ②酸化焰・やや硬質。 ③にぶい橙褐色。	底部からゆるやかに立ち上がり、胴部中 央付近で大きく外反したのち、外側に向 けはぼまっすぐ立ち上がる／回転クロ ロナデ(回転方向不詳)底部糸切り。	①15C～16C前。 ②主に胴部。
36	S P 6	軟質陶器 鍋	口 (35.0) 底 — 高 —	①細粒砂・白色粒。 ②酸化焰(燻焼成)・やや軟質。 ③内外面灰黒色・断面にぶい橙 褐色。	口縁端部は平坦だが内傾し、外側に突出 する／口縁部横ナデ。	①15C後。 ②口縁部。

37	A 軽石 覆土	土師質土器 皿	口 10.0 底 5.6 高 2.0	①軽石・ベンガラ・砂粒。 ②酸化焰・かなり軟質。 ③赤褐色。	体部はやや丸味を帯び、口唇部でわずかに外反／左回転クロコナデ・底部糸切り。	①近世。 ②内外面かなり磨耗。
38	覆面 一括	軟質陶器 鉢	口 — 底(13.0) 高 —	①粗粒砂・細礫を含む。 ②環元焰。 ③灰色。	底部からゆっくり外反しながら立ち上がる／内面は回転横ナデ・外面は雑なナデ・回転糸切り。	①15C前。 ②胴下部及び底部・内面に使用痕。

表1 須恵器・軟質陶器等観察表

石造物・石製品観察表

番号	遺構	器種	幅	厚	高(長)	石質	特徴
39	SK1	宝篋印塔基礎	26.0	19.5	26.0	粗粒安山岩	暗灰色。 被起庵主? 応永二年二月二十三日。 薬研彫りによる彫刻。
40	SK25	石製模造品(剣型)	3.2	1.1	8.6	滑石	暗青色／中央部に稜線が入る。
41	SE1	五輪塔水輪	20.0	15.5	—	牛伏砂岩	黄白色／上下面とも弱い凹状を示す／側面は中央に弱い稜を持つ／中央付近に梵字が見られる／側面は熱を受けたと思われる部分が見られる。
42	SE1	五輪塔火輪	35.0	34.0	22.5	角閃安山岩(二ッ岳軽石)	灰白色／屋根、軒面やや反り返る／軒端がやや内側に切れ込む／柄穴は方形状で約6～8cm。
43	SE1	板碑	18.0	2.5	—	緑泥片岩	暗緑色／主導はキリーク／種子は薬研彫り／紀年銘は不明。
44	SD3	砥石	4.2	2.5	13.4	泥岩	灰色／鉄付付着により石の表面全体が薄く酸化状態／縦方向の使用痕顕著。

表2 石造物・石製品観察表

石臼観察表

番号	遺構	直径	高さ	上縁高さ／幅	ふくみ	分画×構数	供給口口径	特徴
45	SK6	32.0	13.0	—	2.0	6×4	—	下臼／切線主導型?／里見石／暗灰色／芯棒穴は円形(径3cm)摺り合わせ面の残りは比較的良好。
47	SK25	35.0	18.0	2.1／2.8	2.1	不明×5以上	—	上臼／切線主導型?／粗粒安山石／暗灰色／くぼみから上縁部への立ち上がりが直角に近い／引き手穴は方形／すり合わせ面は残存状態かなり良好。
48	SK35	32.0	10.3	2／2.5	2.3	不明	6×5	上臼／牛伏砂岩／灰黄色／供給口及び挽き手穴は円形・くぼみから上縁部の立ち上がりはゆるやか／すり合わせ面は残存状態かなり良好。
46	SK25	38.0	7.8	—	1.7	不明	—	下臼／粗粒安山岩／暗灰色／すり合わせ面はかなり磨耗。

表3 石臼観察表

古銭観察表

番号	遺構	銭名	法 量		铸造年 (西暦)	铸造他	備 考
			径	孔 径			
49	S K 17	熙寧元宝 (篆)	2.3	0.6×0.6	1068	北 宗	腐食がすすみ不明瞭。
50	S P 2	永楽通宝	2.4	0.5×0.5	1408	明	楷書。

表 4 古銭観察表

瓦観察表

番号	遺構	器 種	計測値	①胎土 ②焼成 ③色調	特 徴
51	S K 2	軒丸瓦	径(14.8) 厚(2.3)	①細粒砂・にぶい黒色粒。 ②還元焰・やや硬質。 ③内面及び断面灰色・外面暗灰色。	連珠三つ巴文(左三つ巴・16連子)・巴文と連珠の間に 圈線がめぐる／周縁部、瓦断面は雑なナデ・丸部から 後部は欠損。
52	S K 2	軒平瓦 No. 4	厚 2.4	①細粒砂・細礫。 ②還元焰・やや軟質。 ③内外面暗灰色・断面灰色。	中心飾り、唐草上下反転、子葉で構成される／周縁部、 瓦断面は雑なナデ・右半分欠損。
53	S K 2	丸瓦	横幅(13.5) 厚 (2.1)	①細粒砂・黒色粒。 ②環焰・やや軟質。 ③内外面灰黒色・断面暗灰色。	尻部にみられる釘穴径は1.3cm／玉縁部篋削り・内面 に布目痕あり・内外面に雑なナデ。
54	S K 2	平瓦	厚 1.9	①細粒砂・黒色粒・雲母。 ②還元焰・やや軟質。 ③内外面暗灰色・断面灰色。	横断面形はゆるやかなカーブを描き、凹面左右部が 若干突出する／凹面には丁寧なナデが凸面には雑な ナデが施される。
55	S K 34	平瓦	厚 2.1	①細粒砂。 ②還元焰・やや軟質。 ③内外面暗灰色・断面。	頭部正面に㊦印がみられる／凹面はナデ、凸面も雑 なナデ。
56	S K 34	平瓦	厚 2.0	①細粒砂。 ②還元焰・やや軟質。 ③灰色。	頭部正面に㊦印がみられる・横断面形はゆるやかな カーブを描き凹面左右部に若干突出する／表面及び 側面は篋ナデ。

表 5 瓦観察表

陶磁器観察表

番号	遺構	器 種	口=口 径cm 台=高台径cm 高=器 高cm	①技法 ②文様 ③釉薬(色調)	推 定 産 地 推 定 年 代	備 考
57	S K 1	播鉢	口 34.0 底 — 高 —	① — ② — ③鉄釉、内外面暗赤色、断面淡黄色。	瀬戸美濃 16C～17C?	黒色粒を含む。口縁部内面に綾が入る。口 縁部外面は急激に外反後ゆるやかに内彎。
58	S K 2	磁器 碗	口 — 底 (4.5) 高 —	①ロクロ成形。 ②圈線は見込み部に2条、高台部 に3条、格子状及び草花の文様。 ③乳白色。	瀬戸美濃 18C 後	高台は外側が直立、内側が外傾した三角 高台。

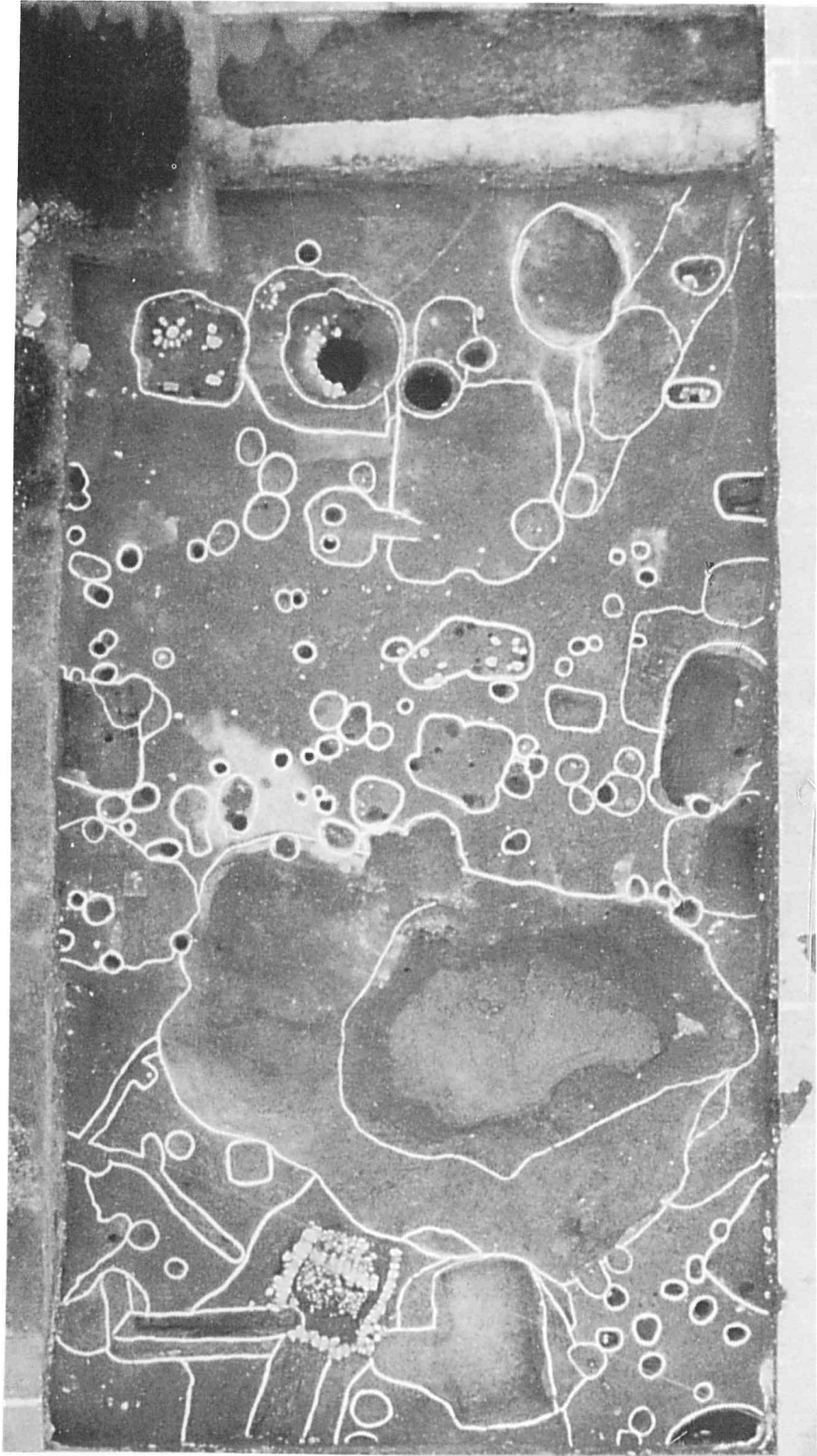
59	S K 2	陶器 碗?	口 — 底 12.0 高 3.0	①ロクロ成形。 ②焼き斑と思われるが内外面に黄 色の模様状のものが見られる。 ③灰釉、灰色。	瀬戸? 18C?	砂粒を多少含む、やや焼き締めた状態 に近い。
60	S K 34	陶器 鉢?	口 — 底 (11.0) 高 —	①ロクロ成形、焼き締める。 ② — ③鉛釉、赤褐色。	唐津? 18C	雲母・砂粒を含む。高台は方形状。 底部にトチン痕が散見できる。
61	S K 35	陶器 甕	口 — 底 — 高 —	①ロクロ成形、焼き締める。 ② — ③鉄釉、外面暗褐色、内面灰黒色。	常滑 15C	長石・石英を含む。 内面の調整は外面に比べて雑。
62	A 軽石 覆土	陶器 皿	口 — 底 — 高 —	①ロクロ成形。 ②内面底部に嵌入が入る。 ③長石釉、灰白色。	瀬戸美濃 17C	気泡が断面全体に散見でき、胎土は荒 くしまりが悪い。
63	覆土 一括	陶器 皿	口 — 底 6.0 高 —	①ロクロ成形。 ②見込み部分に花形の印刻。 ③灰釉、淡緑色。	瀬戸美濃 18C	落雁風の土。 低目の高台で台形状を呈する。
64	覆土 一括	磁器 仏飯器	口 8.0 底 4.2 高 5.5	①ロクロ成形。 ②外面口縁部と体部下方に圈線が 一条入る。 ③呉須、乳白色。	肥前 18C	体部下方はやや直線的に開き、中央付 近で内側に折れ込み線をなす。
65	覆土 一括	陶器 碗	口 — 底 5.4 高 —	①ロクロ成形。 ②内外面に嵌入が入る。 ③灰釉、淡黄色。	肥前 (京焼き風) 18C	落雁風の土。体部下方は丸味を帯びや や開きぎみに立ち上がる。三角高台。

表 6 陶磁器観察表

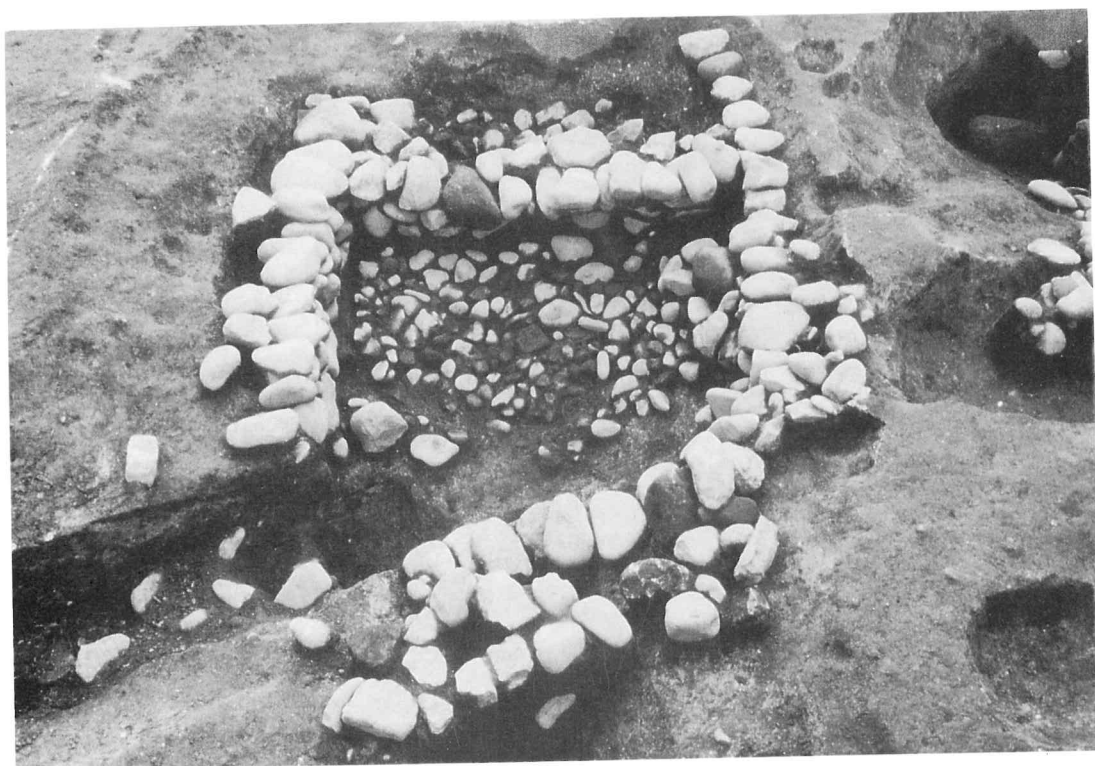
その他の遺物観察表

番号	遺構	器種	口=口 径cm 底=底径cm 高=器高cm	①胎土 ②焼成 ③色調 (石材)	形態 / 調整の特徴	①推定年代 ②その他
66	S K 35	埴塙	口 — 底 — 高 —	①白色粒。 ②還元焰。 ③灰色。	口縁部が平坦。底部から体部に かけて丸味を帯びながら立ち上 がる / 内外面に雑な横ナデ。	① — ②側面全体に気泡が多くみ られる。内側鉤物カス付着。
67	S K 25	石鉢	口 26.0 底 — 高 —	①安山岩。 ② — ③暗赤紫色。	底部から胴部にかけてゆるやか に立ち上がる。	①14C後～15C前。 ②内面に使用痕。
68	覆土 一括	石鉢	口 17.0 底 18.0 高 14.6	①粗粒安山岩。 ② — ③灰黒色。	底部からまっすぐ立ち上がり、 胴部、中央付近からゆるやかに 内彎する。	① — ②胴部内面に使用痕。
69	S D 2	フイゴ (羽口)	口 8.5 底 2.2 長 —	①黒色粒・粗粒砂。 ② — ③にぶい褐色。	平面形状は円形であり、孔径が やや中心部よりずれる / 若干外 面に雑なナデ。	① — ②羽口の先端部に鉤物カス 付着。

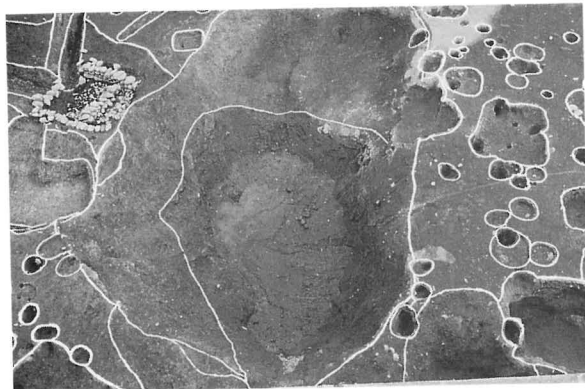
表 7 その他の遺物観察表



調査区全景（左が北）



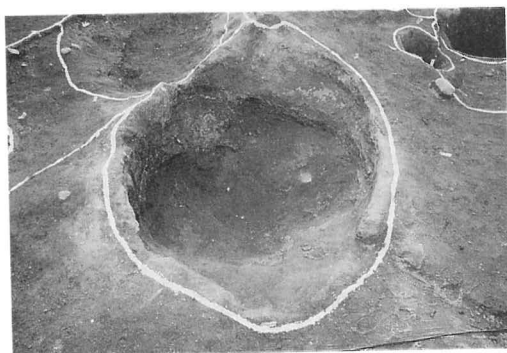
25号土塙全景（西から）



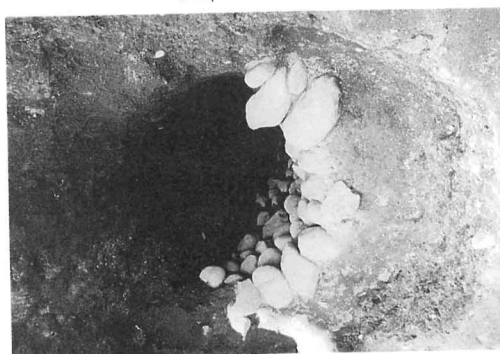
1号土塙全景（上が北）



26号土塙（西から）



29号土塙（東から）



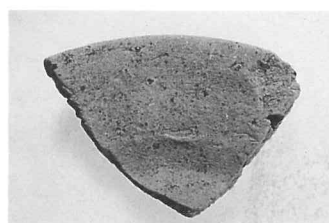
1号井戸（西から）



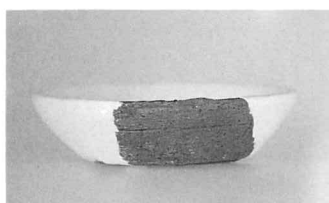
1



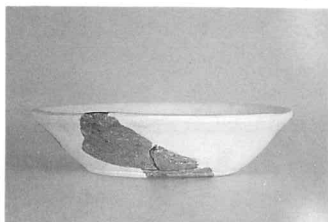
2



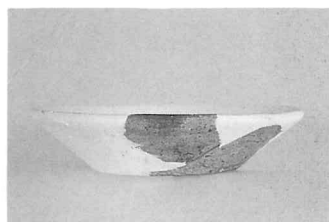
6



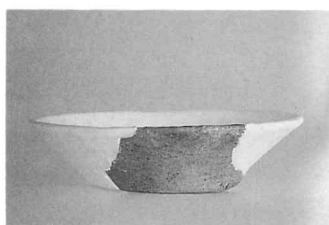
4



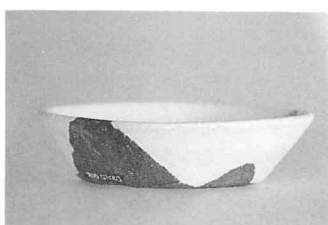
5



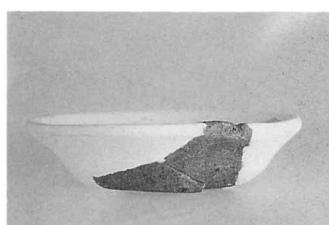
3



10



8



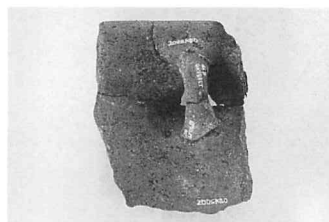
9



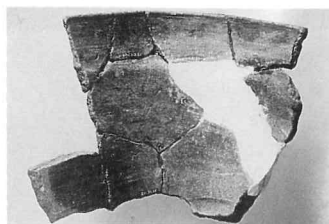
7



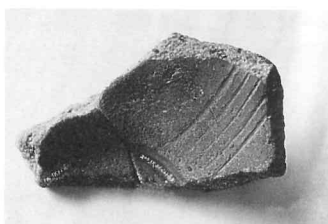
11



12



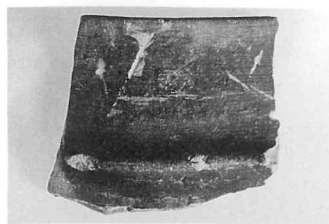
13



15



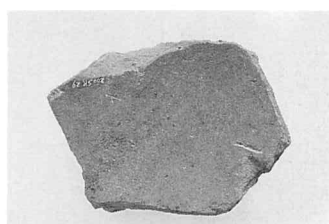
16



17



14



18



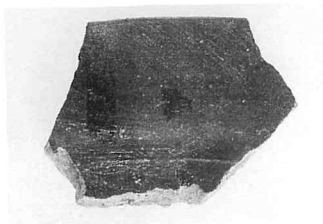
19



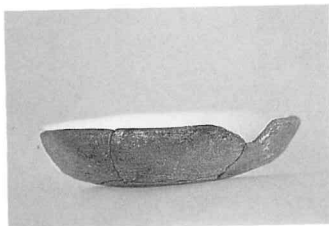
20



21



22



23



24



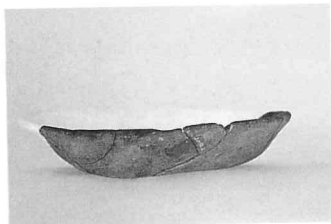
25



26



27



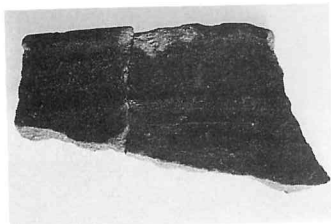
28



29



30



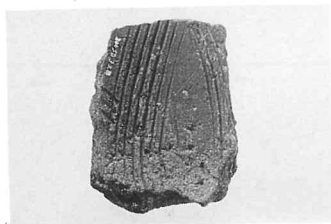
31



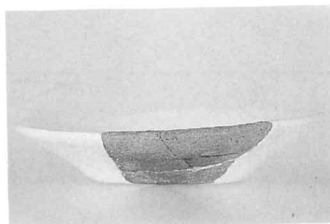
32



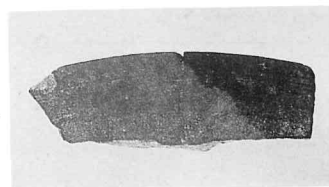
33



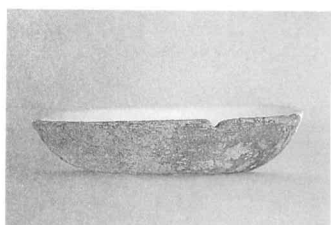
34



35



36



37



38



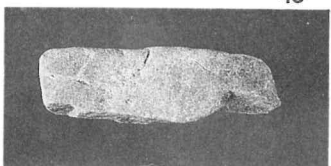
39



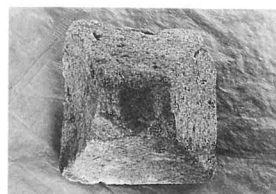
41



40



44



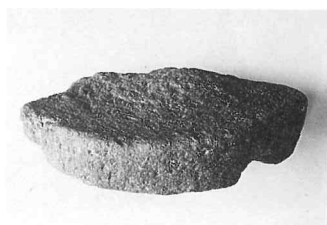
42



43



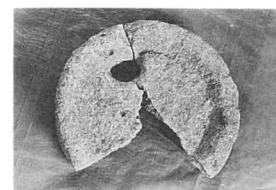
45



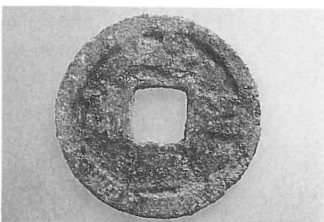
46



47



48



49



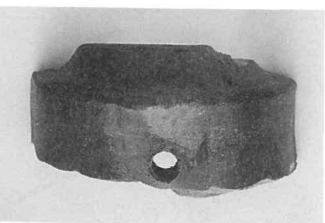
50



51



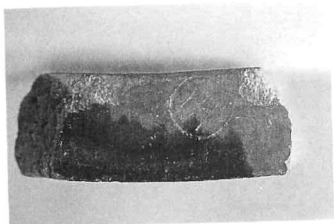
52



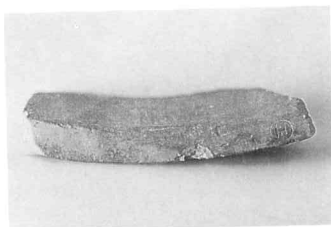
53



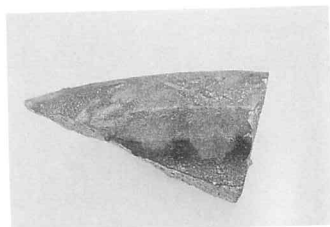
54



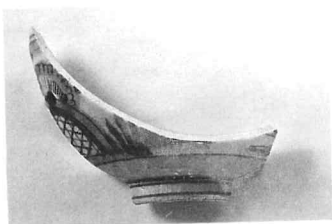
55



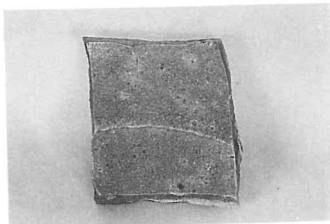
56



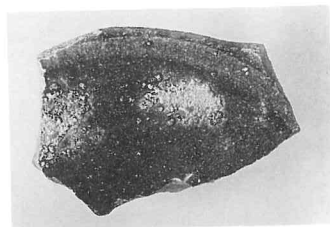
57



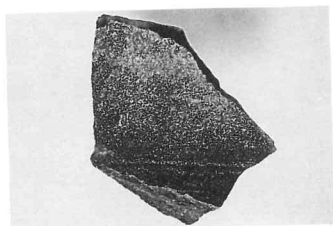
58



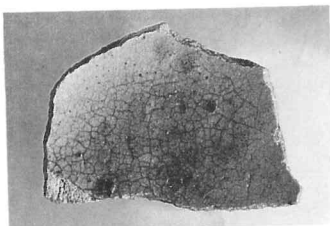
59



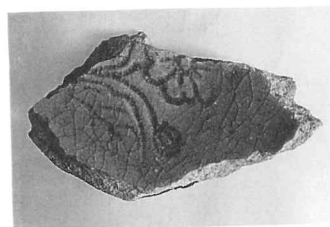
60



61



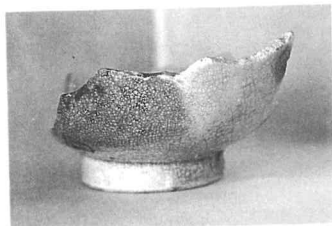
62



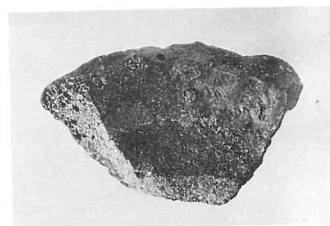
63



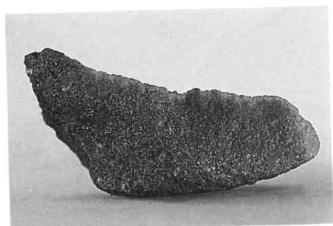
64



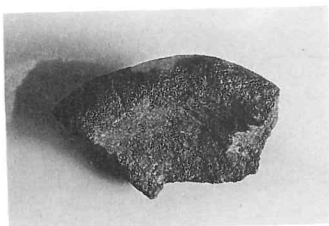
65



66



67



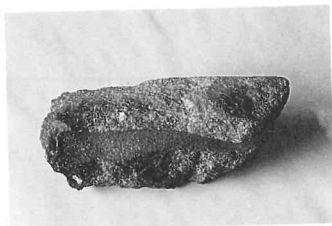
68



69



(70)



(71)



(72)

後 記

秋風の吹く中から始められた調査も、寒さの厳しくなる初冬まで続けられました。調査開始当時に紅葉していた街路樹も、ふと見上げてみると、いつの間にかほとんど散ってしまい、さみしそうな落葉樹だけが目についたものです。

苦勞の甲斐があり、中世和田城の時代に関わると思われる遺構を中心とした、貴重な成果を得ることができました。

これもひとえに、厳しい気候の中を調査に従事してくださった作業員の方々のおかげと思っています。

ここに記して感謝の意を表するものです。

高崎城X

高崎城梅ノ木郭遺跡

平成5年 3月 印刷

平成5年 3月 発行

編集者 高崎市教育委員会

発行者 高崎市遺跡調査会

印刷所 野島印刷有限会社